

384

55

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



384-55

# 名婦傳

時雨著 夢二裝



大正  
8. 5. 5  
内交

小

序

小

序

姿のうつくしいには人の目はすぐに惹かれる。然し世のつねの目には魂の美しくしさを感ぜずに過すことが多い。わたしたちは顔かたちを粧ふために朝夕鏡にむかふ。然し心の姿をはつきりと何かにうつして見ることがをばつねに忘れてゐる。

わたしはもの、本を読むたびに、そのうちに生きてゐる氣高い人の面影を少しばかり選んで、覺束ない文でうつしとめておいた。わたしにはその氣高い人たちの生活の表面だけをまなぶほどの力もないの

が悲しい。

とはいへ私はさうした氣高い人の姿繪を生々した若さを持つ美しい令嬢たちの前へは進めたく思ふ。若い力にみちた優しい魂は値打のあるすぐれたもの、刺戟をばすぐ受け入れられるにちがひないと思つて。

大正八年春

時雨

目次

引田部の赤猪子.....一

白布晒す鄙少女—言葉ちぎりに

大葉子.....八

かぐはしき大和心—落した結文から—倭の國の造手彦—  
あはれ甘美媛—わが大葉子—日の本の方をむきて—妾の  
身を軽く賣りて

千日女.....二五

右衛門爲盛の妻—沖つ島守—女夫の孤忠—荒磯の水垢離

—皇より名を賜はる—千日女と日蓮上人

御匣殿.....四二

やごとなく悲しき境遇—真木柱のかけに藤たけたる—爲  
冬の御仲立—樂しき語らひも束の間—醜の夷の垣間見—  
盡きせぬえにし

伊賀局.....五六

楠正儀の妻—吉野の行宮—諒闇—御世代り—物の怪—辨  
の内侍—如意輪堂—仇なる花はなほ残れども

慧春尼.....七七

發心—美しくしき頼に烙印—機鋒俊敏—山門問答—赤裸々  
淨洒々—火定

津田勝子.....九一

草笛の音色—見出された牧の子—その日から武士—良夫

なとらさうと—悲しき最期—夫の仇は?—つひに手掛り  
を—惱める花—本望の日—櫻ふゞき—士道の犠牲

芳春夫人松子

三三

戦國に生れて—生立ち—木槿垣—秀吉と利家—諸將の消  
長—末の森の籠城—夫人の勇氣—織手の力—化粧田—蒲  
生家の危機—桃山の豪華—一炊の夢—芳春院—夫の亡き  
のち—夫人の禪—人質の十六年—子と別れて

瓜生岩子

一五

平民の友—悲しき印象—母の故郷—寄食人—岩子の夫—  
腕一本で—遺子を並べて—維新の動搖—會津の落城—私  
學校を起す—岩子の上京—大活動期に入る—故郷の事業  
—女傑の死

奥村五百子

三四

二體の銅像—岩子と五百子—今日一日主義—北清行き—  
慰問使—愛國婦人會成立の動機—平民の心—釜山海廣徳  
寺—鶴舞城下—お眼珠様—志士の感化—お嬢様の後姿—  
若き寡婦—古着賣りと賣茶—末期の事業

—目次終—

名婦傳



引田部の赤猪子

自布晒す鄙少女

近代の女性に、このおほどかさを求めようとするのは無理でもあらう。然しながらこの赤猪子の事蹟をかたるのは無意味なことでもなからう。人を信ずること猶かく神を信ずるやうに厚いものは、自己の心を信ずること

引田部の赤猪子

とが猶一層深いものでなくては出来得ないことであらうと思ふときこの愚直なやうな赤猪子の信念の堅さに敬虔の思ひをもたぬわけにはゆかない。そして私たちもことそこかはれ何處までも赤猪子の單純無垢な心持ちをどこまでも持つてゐたいと思ふのである。

赤猪子は雄略天皇の御代に大和の國に生れあはせた賤の女である。何時の代とてもかはらぬは賤の生活のさまである。ことに千四百幾年かを古へにさかのぼつた時代には今よりも總てが簡樸なものであつたことと思はれる。男は耕し狩し女は織り縫ひ洗ふことが重なる日常事で日を暮してゐたのであらう。十七の赤猪子は自然の麗しい大和國の天地の精が生出した稀に見る美しい鄙少女であつた。大勢の娘達がそろつて機織るをりも彼女の聲はすぐれて美しく遠くにまで聞こえ三輪川に白布をさらすときにはおなじやうに打揃うてゐても一きは目立つて流れ寄る芥にま

ざる花片のやうに直様人目をひく少女であつた。その赤猪子が十七の年ふとしたをりに世に御一人の貴人に見初められたのである。山々の春霞は夜半の雨に洗ひながされて空は淺黄に初夏の色を染出すころのことであつた。時の帝雄略天皇が大和の國のうちを御遊覽なされ

三輪川の岸邊に立つて四方の景色をあかず御遠眺になつた。花の色こそ山間にはなけれ、空にも吹き来る風にも春の餘香は薫するやうに漂ひふくまれてゐた。三輪川の水は空には消えた名残の春の色香をとめて紫に見えた。帝は興ある景色にあかず停ませられたをり、岸近くに打揃うて白布をさらす少女の群れのあるのに御心附かせられた。

少女等はつねに見馴れぬ貴人の眺めおはすのに顔を赤めてゐた。紫の水を潜つて瀬に立つ波は美事に白く揃ふしぶきの立つあたりには紅裳が濡れにぢんで脛にからまりつく。——賤の女の手業も生々として面白

引田部の赤猪子



いものだと帝は思召しにかなつたのであらう。猶しけぐとお目をとめられたをり忽ちに麗しい赤猪子に御心がうつつていつた。

「その少女迎ひをとらすほどに必ず嫁がすにをれよ。」

勅りであらうとは賤の少女がなんでしらう、赤猪子は友達の少女と共に腑におちぬ顔をして下けた頭をあけてお姿をお見おくりする時に、引添うた官人の一人が勅りであるからその心をしてをれ、と言つて歸つたのであつた。

言葉ちぎりに

君が一夜のなさけに百年の壽をちゞめるは女の赤心ではあれど、赤猪子の一生は一言の勅りによつてさだめられて、一日を千秋の思ひに空だのみの百年媪と老いさらばつてしまつたのである。十七の春の末の日から八

十の老の坂まではあまり長く、あまり愁き日數であつた。一年は一年と鏡にうつる處女の美の失はれゆくのを苦き誇りに堪忍んで、操の色を涙の玉に磨いてゐたのであつた。

「お忘れになつたのではござりませぬか？ 三輪川の岸でお目にとまつた少女を」

さう言出るのは容易いことではあつたけれど、赤猪子は、

「嫁がすにをれよ」

と仰せられたことばかりを思つてゐた。押懸けて申出るべきではないと思ひとゞまつてゐた。

いかばかり待久しい長い歲月であつたであらう。赤猪子にはその御一言が彼女の生涯であつたのであるけれど、日の本の萬機を司らせたまふ帝には、さるをりの御思出はまことにたまさかの事であつた。ことに勇武の

御性質の帝は雄々しい御遊に多くお心をとられがちであつて、ふとしたまぎれに仰せられたそいふ言は、ありとしも思さぬことのやうにお忘れになつてしまつた。心附かぬでもないお供の官人達もあまり年久しくなるまに、我ことならねば思出すものすら希になり、そのうちに覺えてゐるものもすくなくなつてしまつた。

いまはかくおどろの媼となりはてはと思ふものから赤猪子には傷みの涙はいや繁かつた。ある年郷里より貢物奉つると立騒ぐをり、老の思出にと赤猪子も献上の品を持ちて伴はれ雲井の御垣のあたりにひれふした。量高に積みあけた布こそ、赤猪子が勅言をうけし日より老の日まで織り紡ぎ、晒しあけし細布である。あまりし悲しき年月を今更に忍びかね、赤猪子は慟哭した。おそろく古へ三輪川にて見給ひし少女は嫁がす待ち奉つりしが、いま百敷の禁庭の土踏みならしては思ふこともなければ御暇たま

はると聽上けしをり、帝にも遠き昔見しことあるやうな夢のはなし聽くおここちにて哀れがり種々授けものありて赤猪子の志を受けをさめになつた。赤猪子のそのをりの喜悲の感こそ思ひやられることである。

# 大葉子

## かぐはしき大和心

貞烈な大葉子のはなしは、千三百五十七年を過ぎた今日とても決して古  
 いものだとはいへない。その後になつて武家専横の世となり、武士の道と  
 いふものが出来上り、儒教からも輪廻説の佛教などからも支配をうけた道  
 徳が鎌倉時代以後女の道の掟となつてからは、貞烈で知られた婦人は實に  
 多く我國の花といつてもよいほどである。けれどもさうした教へももた  
 ぬ自由な時代に、この大葉子のあつたことは後になつて教へ導かれたから

こそさうした婦人達が出たのではない、當然我大和民族の女子はかうした  
 強い信念をもつてゐるのであるが、たゞ時世に従つてその現はれが異つた  
 型式をとるだけのこと、本質は實に美しい烈々たる凛とした氣概を持つ  
 てゐるといふことが知られる。私は其處に大葉子を語らうとするにとり  
 なつて、薄命の美女甘美媛をも語らなければならぬ。なぜならばこの二  
 人は情義の二字を分合つてゐるのである。といふよりも私は或は奇矯な  
 言といはれるかも知れないが、その折大和民族の女性を代表した二人の婦  
 人として、貞烈の二字をも等分に分ち與へたいと思ふのである。同時代  
 に然も同じやうな難境におちいつて大葉子は幸福に死んだ人であり、甘美  
 媛は不幸に生きた女である。その明闇兩道は輕々しく是非を説へかねる  
 と思ふ。尤後に至つて甘美媛の生きてゐたといふ事は或は爪弾きされる  
 種であるかも知れないが、それだけに同情される人間としての哀れさがあ

る。ともあれ筆を急がう、事實は空に飾りたてる千萬言よりも短くとも力強いものを語るから。

欽明天皇二十三年壬午の歳の秋七月己巳の朔日のことであると史には記されてゐる。新羅から来た使臣は貢物を朝廷に納めてしまつて自國へ歸らうとはしなかつた。それは日本へ來る途であるうちに生れた國の任那を新羅が亡してしまつたといふ事を知つたので歸る故郷も家もなくなくなつてしまつたらうと思つたからで遂に歸化して河内國の更荒郡鷓鴣野村に住むことになつた。

落した結文から

その月朝廷からは紀の男麻呂の宿禰を大將軍に別に居會山から任那へ向ふのに副將の河邊の臣瓊缶をつかはされた。瓊缶はまづ百濟へいつて

新羅の様子を探らうとした。(この三國はみんな今の朝鮮である)そして薦集の首登弭といふ使ひを百濟へやつて新羅を攻める謀計の打合せをさせた。ところがこの登弭といふ者は歸化人ででもあつたのか、それとも妻だけが彼地のものであつたのか、大切な使ひをした途中であるのに妻の家の扉をたゞき一泊したのであつた。それだけであるならば軍律に觸れただけで済みもしたであらうが、一大事をしてしまつたといふのは謀計の謀合せの結文をゆひつけた弓箭を途中へおとしたのを氣がつかかなかつたのである。誠に不覺なことではあるが、大事の出来るをりは思ひがけないことが仕出かされるのは今も昔も變りはない。

さうとは知らぬ紀の男麻呂大將軍の方では勝に乗り威をふるつてゐた。百濟に軍營をうつしてからも軍規は肅然と調つてゐた。ある日も兵士どもに令して言ふのは、

「お前方は日本の武夫である。それを忘れてはいけない。そして勝つても敗れることがあるのを忘れてはいけない。勝つをりもあれば敗れるをりもある。敗れるといふ事を知つてゐるさへすれば勝つても大丈夫だ、本當の勝利だ」

と説き聞かせた。その上にも懇切に、

「安泰でも危きを慮れとは全くよい教の言葉である。古の人は善いことを教へたものだ。今は疆畔に豺狼は交接つてゐる。軽々しくして後の變難を残すな。そして忘れてならないのは平安の世にも刀劍は身を離さない事だ、まして只今の時である。蓋それが君子の武備といふものだから已むを得ない。よく深く互ひに警戒あつて務めてこの令に戻らぬやうにするがよい」

と命令した。兵士共はみんな心を委めて大將軍の令に心服してゐた。

ところがかの速り男の副將瓊缶のみが獨り聽かなかつた。勝ちにのつた彼は突進んで實によく戦つた。それに新羅の方では登弭の遺失した密計の書を見てから、急に大兵を集めて攻めかけたのであつたが却て大敗亡した。こんな筈ではないがと思つた新羅の鬪將もよんどころないので白旗を立てて降伏の意を示した。もしそのをり瓊缶がもすこし戦場の駆引きに巧妙であつたならば、そんな過ちはなかつたのであつたが、彼れは敵が降首して白旗を上げたとは知らず、無二無三に突入り攻入つてその白旗の近くに進んだ。それを見ると敵將はかう叫んだ。

「みんな見るがよい。將軍の河邊の臣がやつてきた。あれは白旗をたてて降らうとほつしてゐるのかも知れない。それならば逆襲してやらうではないか？」

もとより何國のものとても人にかはりがなければ人情に差別のあらう

善はない。負けたくて負けるのでもなければ降伏を敢てしようとするものでもない。よんどころなく出した降伏の白旗のもとへ向ふ見ずに寄せてくる瓊缶の手につづく兵士とはすくない。敵將はこの時であると思つた。そして自分から出した白旗とはいはずに瓊缶があつた白旗のもとへ寄つて来たのは降伏するつもりなのであらうと言つて士卒の氣を引立てた。戦ひはこの僅些な意味の違ひで逆になつてしまつた。急に立直つた逆戦の鋭刃は鋭かつた。瓊缶の手のものうちで先手は多く傷つけられた。

倭の國の造手彦

副將の手に従つてゐた倭の國の造手彦はこれはとても救へないなと見てとつたのでこの情況だけでも紀の將軍の方へ知らせたいものだと思つた。

も遁走しようとした。敵將はそれを見るとやつてはならないと劔戟を廻して追ひかけた。城の油に追詰めるとすこし遠い手ごろではあつたが、戦で造手彦の背を撃たうとした。造手彦はさうされてはならないと幸に駿馬に跨つてゐたので、一息に城の油を飛越して漸くのがれる事が出来た。瓊缶も遂に辛くして兵を引上げ、やつと近い野邊に陣營することにした。どうにか逃れ得て陣營を敷いたもののもはやその折は副將の價値はすこしもみとめられなくなつてゐたのである。兵卒たちは急に輕蔑にしばじめ、もう軍令などは聞かれもしなかつた。それだけならばまだよいが、兵卒等は副將の河邊の臣瓊缶とその他の者共を不意に起つて生虜にしてしまつた上、敵將の營中へ引いていつた。この時になつて、我大葉子も甘美媛も史上の人物になされたのである。情を知らぬものたちは婦人達をも幼子をも容赦はしなかつた。父子夫婦救ひたくも救ひあへぬはめとなつたの

である。

大葉子の夫の名は調の吉士伊企いけと呼ばれて人爲の勇烈しい人であつた。勇武であつても虜となる憂目を副將の軍にあつて嘗めさせられた。彼には妻の大葉子のあるばかりではなく舅子といふ男子もあつた。彼等親子は三人とも救ひあはうとして却て三人とも生擒されてしまつた。美甘媛は坂本といふ人の娘で瓊缶の妻であつた。

あはれ甘美媛

捕虜は一人一人敵將の前へ引出された。瓊缶が引出された時には、可憐な風雨に傷む芙蓉の姿の甘美媛は虎のやうな敵將の足下に引据ゑられてゐた。そして瓊缶をその前へ引出すと、

「お前は命がほしくはないか。お前の命とこの婦を孰れがをしいどちら

を愛みめでるか？」

もとより軍規も見得もない敵將は獸のやうに吠えたてた。瓊缶はその時に分明と、

「なんで一人の婦を愛んで、この身の禍をとらうか」

と言つた。瓊缶の目にそのをり甘美媛が鬼とも見えたのではない。あはれな、悲しげなさまは、人一倍胸に應へたのであつたが思へば彼は副將の重い役目であつた。そして今日のこの恥辱のあるのは彼の謬りであつたので、彼はどうにでもしても一度生きてたく思つたのである。短い言葉にかへるまでの彼の心の苦みはどれほどであつたであらう。流石に甘美媛には瓊缶の心中がよく分つた。分つたばかりに死にまさる恥辱をも忍ばなければならなかつた。彼女は死にたかつたであらう。然して彼女は死ぬことをさへ愛する夫の爲に出来なかつたのである。彼女が生きてゐて従

はなかつたら瓊缶は許されないものであつた。そして瓊缶も彼女も忍びがたきことを忍んだ。歸還されるものの心もどのやうであつたであらう。が甘美媛こそ哀れの極みであつた。敵將に愛などのあらうやうもない。彼女は猛虎の前に投出された一片の生肉に過ぎなかつた。

わが大葉子

それを思へば大葉子は幸福なものであつた。彼女は夫の伊企儼と子の舅子と一所に三人揃つて引出された。敵將は美しい甘美媛を得てゐたので大葉子に向つてはさうした難題を持出さなかつたが、

「命令に従へばゆるしてやる。降伏すれば命は助けてやる」

と伊企儼にむかつて言つた。そして伊企儼が黙して返事をしないので、他分命令にしたがふのであらうと推測して彼等を城の壁の上に引出した。

「さあ命にしたがへ申附ける通りに言へ。日本の方へむいて、日本の方へむいて、我が臍を齧へと叫べ」

といふのであつた。それを言はせる爲にと、敵將は直に斬りもしかねない見幕で刀を抜いて側にたち伊企儼の禪を脱がせ、日本の方角へむかつて尻髻を向けさせた。そのをりに夫の心中をよくしりきつてゐた大葉子は自若としてすこしもやきもきするやうな事はなかつた。舅子も落附いて父の仕様を見てゐた。伊企儼は最初命じられた時にこそ奮然と憤怒の色を見せたが最後には妻子の方へむかつて意味深い笑める目を見せた。そして彼れはいま命の極であることも忘れてゐるかのやうな慈相を妻子に見せた。けれどもそれは一刹那であつて、彼れは敵將の面に烙印のやうな暑さの炎の眼をむけて、

「新羅の王、我が臍を齧め」



と叫んで尻を敵將の方へ廻した。我から言出したことに狼狽したのは新羅の將であつた。彼は伊企儼の罵りをとやめようと彼を責め苦めた。けれども伊企儼は叫びつけて殺された。舅子もまた父の殺されるのを見たと父のした通りにしておなじやうに殺されて死んだ。

日の本の方へとむきて

大葉子はしづかに進んで城の上に立つた。夫や子と同じ事を言へと強ひられたが彼女は女はいなんだ。ただ彼女は女らしく新羅の王云々といはなかつた。遠く遙に屯する日本軍のある方を見て白き領巾を二三度振りうごかした。そして日本の方角を眺めて拜をし、目のまへに横たはる夫子の死骸に目を伏せながら、

からくにの城の上にたちて大葉子は、領巾を振らすも大和へむきて

と唄つた。また一かへり唄つていふに、

からくにのきのへにたたし大葉子は、ひれふらすみゆなにはにむきてと。そして従容として夫子と共に死につきおなじ道へと急いだ。

（この歌は遙かに大葉子が城の上に立ちて領巾を振り、日本へむいて拜する姿を眺めた、日本軍の軍士達はその猛き心を嘆美して誰が唄ひ出したともなく忽ちに和同して唄ひ、遠く遙かに大葉子の刑されるのをいたみたへた歌であるとの説もある）

大葉子はさうして死についた。彼女の死は日本軍の士氣を振ひたせに違ひない。彼女の死は千三百年の古へにあつて世界的であつた。彼女の死もさうなれば彼女の夫伊企儼の壯烈な死も諸將帥の痛惜するところとなつた。

河邊の臣瓊缶と甘美媛はどうなつたかといふに、甘美媛は夫の瓊缶の男

子の面目ををしみ彼が生還するまでは醜い我肉に命を與へておかなければならないとの觀念はあつた。けれども身のすべてを投捨てまで夫の志望に従はうとした妻には、あんまり怨しい夫の心がうつつて見えた。覺悟きはめてゐた媛にも、夫の口からは、

「身にも代へがたい愛しいもの」

と出る言葉を心の底の底では期待せずとも聴きたい心が秘んでゐたかもしれない。それが目前で獸の餓ゑた慾をみたされるのを、よしさう言切つたあととはいへ、見て見過されぬ筈を、何處までも彼は堪へて生きながらへて立去つた。甘美媛の心では汚されるとも、夫の無事をはかるまでは死なれない、その後は……と思つてゐたかもしれないが、捨てゆかれた彼女は死ぬのをふと考へる様になつた。固よりそれは夫の爲へでも、夫への操でなくとも、身自らの處決でなくてはならない筈ではあるが、甘美媛には死ぬに

も死にきれない怨恨が生長らへさせたのであらう。彼女は大葉子の死が、日本國にまで傳はつて貞烈なものとされてゐるときに、どうしてよいか知れぬ體をはこんで生還つてきた。

妾の身を軽く賣りながら

瓊缶こそ恥知らずの極みであつた。彼れは甘美媛が還されて來たと傳へきくと、すぐに使ひをやつて逢ひたいといつた。瓊缶にすればもともと愛してゐたものである。ことに爲に命を助かつた恩人である。早速にどうにかして彼女の悲嘆を忘れさせてやらなければならぬと思つたのであらう。それこそ日夜心懸りであつた事が、やうやく邂逅ふことの出来る再會を正直によるこんだのかも知れない。けれども甘美媛はなまじひにさうした使ひを受けたので、猶更に慚恨んだ。

「むかし貴夫は妾の身を軽くお賣りなされたではありませぬか。いまになつて、なんの面目あつてお逢ひなさらうとおつしやるのですか」と辱めた。その折の心では瓊缶にはまだ愛も未練もあつたかもしれな  
 いが甘美媛の方には憎みと悔蔑とが残つてゐるばかりであつたのであらう。私はかう記してゐるうちにも、前に言つた通り無慙なとはいへ、大葉子の死は幸福であつたと思ふのである。それは尋常の女子の出来る業ではない、全く勝れた凛烈な女であると貴むが死にも得せぬ悲惨きはまる甘美媛の汚名にくらべてなんたる幸福なことであらうとさへ思ふのである、そして大葉子を讚美すると共に長く長く汚名をうけてきた甘美媛も近代人の理解に價するところがあるゆゑ、いままでのやうに虐けられはしまいと共に記しておいたのである。

# 千日女

## 左衛門爲盛の妻

一族に荒法師の文覺上人——即ち遠藤武者盛遠をだした渡邊黨の中で、優にたけき武夫ときこえた遠藤左衛門爲盛の妻に千日女といふ名を順徳帝から頂いた女がある。その小傳の一節を此處に記さうと思ふ。  
 千日女は初めの名をなんとよばれてゐたか、また誰の女であつたか、その生立ちを私は不文にして知らない。左衛門爲盛の妻となつてからの彼女は夫とやらんで和歌の道に秀で、歌道の造詣の深かつた女である。

夫の爲盛は順徳帝に仕へて従四位上左衛門尉に叙せられてゐた。順徳帝は史の語る通り専横な武家の手から政權を帝室へ取りもどさうとなされた人も知つた激しい御氣質であつた。はじめ此の大事は三代の帝王の御計畫であつたが御鳥羽上皇は隠岐の島へ土御門上皇は淡路へ此院は佐渡が島へと事成就ならずして餘儀ない御幸を敢てなさらねばならぬことになつた。逆臣北條氏を亡ぼさうとはかねてからの御計畫であつた。御鳥羽院の御所鍛へと世にいふ菊作りの御太刀は宮中へ諸國から名ある刀鍛冶を召され帝みづからの鍔をとりお手を下された作もある。一輪の菊花を銘のかはりにお打込みなされたのであつたがそれはみんな後に朝敵御追討の意味あつての事と知られた事實である。爲盛とてもあの荒武者法師を生出した激しい血潮をひいて生れてきた渡邊黨の一人である。さうした時世の變遷にいたづらに花鳥風月の詠にのみふけてはるなかつ

た。仕へたてまつる君と共に鬱勃たる霸氣を三十一文字に籠め君と志をひとつにして不斷の活火を心に燃してゐたのである。女とても世の雲行きのだだならぬけしきなのは目に映り心に響いた。彼女は恰慟だちて口にこそせぬが彼女の心も夫と共に勤王に深かつた。大君の御心をも夫の悲憤をも察してゐたのである。そして彼女は殊勝にも夫に従ひ御幸の御供をして都を北へ幾百里雁金だにも一年に一度よりは訪はぬ荒海を越えて佐渡の島へ渡つたのであつた。

### 沖つ島守

絶海の島守と流されては、いかに御心猛くおはしまして、御武勇の帝であらせられたとはいへ、熊のやうな下人より他は住まぬ御領の果の荒夷どもに守られて、いつまた帝都へ立歸りたまふやいなやも知れぬ日を送りま

すのであるから、流石に御心も萎れ鬱々と樂しまぬ日をお送りになるのであつた。都より従ひ供奉するものどもは、その御様を見上げるのがどのやうに切なく苦しかつたであつたらう。爲盛は御前をすべり我住む小屋へ歸つてくると妻の手をとつてはおいたはしい御様子を聴かせて落涙するのであつた。御座の御所とても名のみで作られてゐる。それでも兎も角も黒木作りの雨は洩らぬほどにしつらはれてゐる。その宮の大前でさへ、夜毎まるる燈火は人々の心のやうに打濕つて黒く暗いものはかない景色に點つてゐる。まして爲盛づれの小屋には夜風をしのぐ葦戸のかけにゆるめく魚燈の鈍い光が夫妻の濡れたまぶたにも果敢なけにゆらめくのであつた。そして荒波の音は二人にも想へとばかり眠りかねる夜を、夜すがら夢をむすばせないものであつた。

禁裡にましましてはととも左衛門の尉づれの妻が拜み奉ることもかな

はない龍顔をしけじけと御側近くにて拜みある時は都の御物語をさへ遊ばされるのを、彼女は言はうやうない勿體ないことに思つた。そしていかに二心なく御側をはなれず侍して居るとは云へ、男子たるものへはおかしくしなる御涙さへも、彼女の前へは強ち後めたくおぼさなかつたのである。彼女はどれほど恐れ多いことにもおいたはしいことにも思つたであらう。

### 女夫の孤忠

ある夜爲盛は御前をさがつて來てのち打くつろいでゐるが、妻の夜食のあとかたづけをして暗い魚燈の影に、絲針をもちだして、供奉の人の幾月か着たままの鹽馴れ衣のつくろひかけるのを見ると、

「暫時咄をしないか」

と言つた。そして自分も讀みさした書物を伏せた。語りあふことは何

時とてもありしをりの事どもや今の哀れさや、またはやがての未來を言ふのであつた。ふと言出したことばに酔ふ時には黄金の花さく未來がすぐ目の前に明日にも手の届く場處におかれてあるやうに醒めたる夢を見頼母しがり、悦びあふのが常であつたが、心の静なをりは、さういふ空頼みは覺束ないものとのあきらめが、ともすれば夫妻の心をさびしくさせた。今宵も爲盛は御前でのことを語りきかせて、御製の詩や、御述懐の御詠などを聴かせたり、その詩歌の思召のあるところはかくかく、かえかうと繰返しては詠じ聽かせてゐたが、はては感に堪へかね袖を顔に押當てさめざめと泣いた。彼女もまた、日頃からの御有様を思出して袖をぬらしてゐたが、夫の口から傷心にたへぬやうな聲音できかせられると、泉が湧出すやうに熱涙がこみあけるのであつた。

「おいたはしや、一天萬乗の君様が……」

夜もすがら繰返して夫妻はかう言つてゐた。その曉に爲盛はほんの暫くの間まどろんでふと目が醒めると、お人すくなの宮居ゆる早く罷出て御用をつとめようと起出でた。いつもならば早くから厨に飯の支度をしてゐるのに、その朝にかぎつて妻の姿の見えないのを、別段不審しいとは思はなかつたが、どこへいつたかと思ひながら、庭戸をあけて、笕の水に口嗽ぎなどした。

あかぼしの影はまだあけきらぬ竹藪の上に残つてゐる。常ならば我家から朝餉の煙が薄白う立昇つて、槐樹の梢をかすめ、明け方の紫の横雲と一つにうすれて遠くに流れるのであるのに、爲盛が例の通り四方の空に手をあはせて、君の御運を祈り終つても、家の廻りを一廻りしてきて見ても、家にはそんな氣もないのであつた。爲盛は戸を引きあけて、

「さあ早くせねばならぬぞよ、もはや雀も唄つてゐる」

と聲をかけたが内にも居ぬか返事がなかつた。不思議に思つてゐるとそこへ後から聲をかけて、

「眠られぬので夜の白々明けから海へゆきまして、御用の間をかきました」

と言ひながら、さういふうちにも手まめに柴折りくべ、彼女は朝餉の用意をしはじめた。

### 荒磯の水垢離

それがその朝だけではすまなかつた。さうした様子が二朝三朝つゞいたので、爲盛は妻を疑ふ心は微塵も持たなかつたが、いづれ何か子細のあることと、一朝わざと深眠りをしたさまをして、妻が出てゆくのを見届けるとすぐに彼も後を追つていつたのであつた。そこに爲盛は何を妻に見出し

たか—

「願ふは諸天神諸菩薩君の御運開かせたまふやう守らせたまへ。いま一度都へ還御あるやう護らせたまへ」

祈るのは彼女である。いかに心は健くとも都上蔭の水仕するさへ馴れぬ身であるのに、日頃の勞苦と寝もやらぬ勞れとに、ともすれば激浪にまかれ、さらはれようとするのであつた。それを見る爲盛の心はどのやうであつたであらう。この荒海の波にもまれながら、潮垢離をとらうとは彼は思はなかつたのである。彼女は一心不亂である。後に夫が停みきかうとは知らぬ。そして彼女の夫も心のうちに、

「あはれ日本の神々、かよわき女の頑固に祈る一心酌みたまはば何とぞ彼女の祈念をうけ容れたまへ。そして念ずる女の命もまもらせたまへ」といつたが、

「假令彼女の命を召さるるとも……」

と念じかへした。そしてかう言つた方が彼女の魂がよろこぶであらうと思つた。爲盛は妻の心のゆかしさ殊勝さを見るにつけ、我も和女に忠義は劣らうかと嬉しさに妻とは思へずその後姿にむかつて手を合すのであつた。

爲盛は彼女が氣付いては心まづいであらうと思つたので、一足さきに家に歸つた。夫は妻の心を思ひやつて、何氣なく朝寢するさまをしてゐるが、ともすると彼の目からは感謝の涙が流れて、まぎらすのに氣を遣ふほどであつた。

皇より名を賜はる

然し、その有難い彼女の志はいつしか君の御聽にも達した。彼女の夫は

知らぬさまをしても、いつしか日數もふるうちに誰の目にかとまつたのである。彼女は御前へ召された。御自御下問があつたので、彼女はあらずもがなと思召はなされまいかと、おづおづとお答へをした。

「よくも致してくれた。日數は千日といふか？」

君の御目にも涙があつた。王位を輕んずるものあつて、かくおはしますのを日本の神國の世も末かとはかりの御嘆のをりからとて、彼女のあることがどれほどのお悦びであつたであらう。御あたりを見返らせられて、何かな賜けものにと御覽じたが其處には何一つ取らせようとす御調度はなかつた。

「とらすものもなうて……」

君も慨然としてお出になつた。見上げるものどもは堰きあへぬ袖を絞つた。天の下のもものは草の葉にいたるまで君の御物でないものはないに、



小き國一つ、莊一所、それまでもなく當座の御授物にさへ事缺きたまふとは何らの仕業ぞと聲をあけて泣くものさへあつた。

「何もなうて……千日女といふ名をとらする」

との御説があつた。やがて他日と思召されたが仰せには出されなかつた。彼女は他日の恩賜よりも、一生朽ちない名の賜物をどんなに悦んで拜受したことであつたらう。

とはいへ神の御子の御末にも遠ざかる御運は呼返しやうもなかつた。そして待たる、善き日の來ぬうちに、君の御惱は募つていつた。千日女の祈念も空しく御無念のうちに再び帝都へも此世へもかへらぬ道に出立たせられてしまつた。臣下と國民の悲憤の涙乾かぬ、佐渡が島の土と消えさせられたのである。千日女の魂は嘆きにくはれたやうになつて、空虚な日を息のあるばかりに暮してゐた。漸く心地づく、と夫爲盛の同意を得て、夫

妻して落髪し、御陵のある麓に庵して千日尼と名のつてゐた。

それは仁治三年のことである。其後三十年二人の僧尼は清くさびしく、法の師とあふぐ人もなければ、君の御墓守となつて南無佛と朝夕に唱へてゐたのであつた。

千日女と日蓮上人

佐渡が島は、その以前法念上人の流されてゐた以來、上人流謫の幾年間に教化されたところとて、淨土宗に歸依のものが多かつた。文永八年といふ冬に鎌倉からその頃の異端者と見なされた、法華經の論者大改革者である日蓮法師が謫されてきて、心せまい島人たちは異教者と見て、一宿の軒をかすものがなかつた。そして一飯を恵むものもなかつた。

日蓮法師は塚原といふところに名ばかりの三昧堂を建て、蓑と笠とに僅

かに風雪をしのぎ飢と寒さとに命も旦夕であらうとさへ思はれるほどの難苦を凌いでゐた。その塚原といふ土地と千日尼が住むところとは二里程のへだたりがあつた。さうした尊い行者がこの島に來られたのを聞くとき千日尼は悲しくも忝じけなくも思つた。島人はおのが小さい見方から、都から遙々罪を得てくるものによい人はないと思つてゐるのであつた。淨土の法の道をひろめ南無佛をとなへ手を合せることを教へたかの法念上人はあつてもたまたまさる尊い上人があつたので、誰もが彼僧と一つではないといつて聞かなかつた。千日尼は都の上流に育つた。時世とあはず執政者と意見のあはぬために、時としては貴い人が流されることをよく知つてゐた。その上に彼女自身夫妻も、仕へまつる君と共にこの島に埋れはてたのである。たとひ宗旨はかはるとも佛に歸依し佛をがむに法師を憎むことがあらうかと彼女は心をきめた。彼女は夫にむかつて、

「日蓮法師といふ御僧が飢餓にせまつて御出と承はりました。お救ひまをしたいと思います。」

と救けをもとめた。爲盛もいまは雄心をすてて無二の佛僧である。彼ははいふまでもなく同意した。

二里の道の行きかひは雪の日などはかなりに遠かつたが、千日尼は夫と共に一日も缺かさず通つた。米を背追つてゆく時もある。衣を縫ひあけて持ちゆくこともあつた。この僧尼は初めは師として仕へるころでもなく通つたのであつたが、一夜雪に降りこめられて庵にあかした夜法華經の奥義の教化をうけ翻然と歸依して改めて日蓮を禮拜した。それから毎夜毎夜聴問した。四年ばかりの佐渡の住居に日蓮上人は一の谷といふところに庵をしつらはれてからは爲盛も千日尼も傍に庵をむすんで朝夕の營みをつくし仕へてゐた。日蓮が鎌倉へ歸洛してからも尼からの音信

は絶えなかつた。其後甲斐の身延山に入り武藏の地上に入寂されるまで、千日尼は老師の身を案じて便船あるごとに音信を缺かさなかつた。そして爲盛も千日尼も陵のある地を永久に立離れず思ひやうでは心豊にそして心寂しく世を觀じて去つた。

## 御 匣 殿

### やごとなく哀しき境遇

女夫の契り睦じき仲らひであれば女には夫が生活の全部でなくてはならない。我生命である人の不慮にあへばその女の生活は失はれ、その女生は何の意味もないものになつてしまふ。女人の總てがさうであるとはいはれないが、それは極めて相愛するものだけが首肯する充實した愛の力である。尊良親王と御息所との御なからひもさうした御睦であつた。下様のものが突詰めたやうな激しさこそ御行狀に現はれてはるないが、いか

ばかり思ひせまつた御仲であつたかと、そゝろに本全の情と、生の愛着といふことを考へさせられ、別離の苦惱が何時の世も、人類の背負はなければならぬ、盡きぬ負擔である事をも繰返し考へさせられる。

御匣殿とよばれた麗人は、時の皇太后宮の御匣殿として仕へた今出川左大臣の女子である。徳大寺左大將實相卿にお輿入れのある約束であつたのを、御醍醐帝の一宮尊良親王の深く思入りて、此君をおきてはとまでの御心盡しを知りて、徳大寺左大將は約を破つて宮のお心安きやうにと身をひかれたのであつた。さうまでになつたのもながい日の後の事であつたのである。そして奇しい物語もある。

そもく一宮に生れさせられた親王には、春宮にもならせらるべきお方であつたに、北條のはからひにて春宮には、後二條帝の王子がたてられる事になつたのである。一宮はいみじき才學とめでたき御容顔をもたせ

られながら世を寂しく送られなければならぬ立場にならせられたのである。それゆゑといふでもなからうが、宮中の御遊びにもさして興ずることもなく、御心に染む思ひ人ともなく過されるのを心にかけて、あれこれと御息所がねに申進めいづるものもすくない數ではなかつたが、いかなることか御心のとまるやうな女性はなかつたのである。

眞木柱のかげに蕩たけたる

宮は現し世の人にはあらぬ一人の女性に心を寄せてゐられたのである。紫式部の麗筆に生を與へられた宇治拾遺の優婆塞の宮の御娘大姫君こそ彼の宮の思ひものであつた。いつのほどにか勝れたる繪師の筆にうつされた眞木柱のかげに琵琶を調べつゝ、雲がくれたる月の出しを扇にかへて撥をかざして覗きかけたる繪の君の姿の蕩たさに思ひしみて、かゝる君

もあらばとのみ思ひつけられたのであつた。ある日賀茂の糺の宮へと詣でられ御手水川の河邊を逍遙して秋深くなりまさりゆく神寂たる境に詩趣をたづね暮靄のせまるころまでおはしましたをり村雨は音もなく忍び寄つて御袖を濡しかけた。すぎゆく雨の今來しかたへと御車を急がして、一條を西へと、はや暮れたる途を通らせられると住荒れし物さびしけな宿から氣高い琵琶の撥音がきこえた。宮はふとそれを耳にしたまひ車をとめさせて御覽あると遙に見入る人のあるぞとは知らぬものから時雨の雲間より漏る月に御簾高く巻きあげさせて十六ばかりのあでやかなる女房が秋の別れとばかり弾く様が名残りなく見出でられた。その御様を見ると、宮は夢ならでは逢ふよしもなしと思したる女を發見られたるうれしさに、そいろに御車から下りたせられたのであつた。この女こそ繪の君にすこしもたがはず、一層あでにらうたけなお方である。かうしたお人の

世にあればこそ、この君を見出すまでは仇なる方には目もゆかなかつたのであらうと、宮は頑固であつた我お心を嬉しくさへ思はれたのであつた。近く寄るまではと、お忍びであつたが落葉を踏む音に人や來るとさとられてをしき女君の姿は奥深く紛れ入つてしまつた。侍共は女中達に言ひつけられて格子をおろしに來たりした。宮もいつまで停みおはせばとて入りにし月の面をふた、び見るはまたのをりならではと思召したのでそのままお立歸りになつた。それからの御物思ひは色に出で人に問はれるほどであつた。繪に描きし君なりと知るくも、かやうの女ならではと思召したほどの歲月であるに、いまは目のあたりに思ひそめて戀渡らせられる御事ゆゑ見る目も痛々しく、二條中將爲冬が漸くの思ひでそのことよしを御口から洩れきいたのであつた。

爲冬の御媒立

爲冬は種々に才覺して詩歌の會にことよせ宮を今出川殿へ案内した。主人の左大臣は宮の御出を光榮に思ひ夜をかけて人々を饗應し宮の御興を殺がぬやうにと心づかひをしておもてなしをした。宮は夜更けてひそかに西の臺のかたへと御忍びあると其臺には姫君の御居間があつた。姫君は花紅葉の散りみだれたる屏風を引きめぐらして燈火の幽なるもとに起きもせず寝もせぬさまにて人々の詠みたる歌の短冊を父大臣が廻してよこされたのを見てゐられた。その風情を消入る心地にながめあかして御歸館ののち御心盡しのほどを細々と傳へられた。千束にあまる御文を女君も哀れと思ひ知りながら徳大寺卿との事もあればつれなくて一度のおかへしもなく過ぎてゐた。ほどへてある儒者が宮に召されたをり貞觀

政要を讀み論議したてまつつた。宮はつくづくときこしめして、

「古への人はかく賢人の諫めをきくにわれはなべて人の心を破るか。」

と御身を責められるあまりにわが思ひみだれし文のあとをたたば女君をも切なき思ひに泣かせ奉ることはあるまじと断ちがたき思ひを忍び御使ひの道をふつと断せられたのである。さほどまでの御苦みを誰つたふるとなく徳大寺左大將の耳へはひつた。我れはさほどにも思はぬ女にただ苟且の約束あるばかりに宮にさほどの御思ひをさせるは安からずと左大將は心をひかれる女の方へとばかり通ひ馴れて御匣殿を迎へる事などはふつと思ひたえしやうにしむけられたのでいまは心安しと女君の方より打解けたる御返事をさへするやうになつた。

樂しき語らひも束の間

彼方此方やうやく春の氷のやうに解けゆきて、かたき心もほつれそめ、御代の春こそどけくもあれと言祝しも束の間、御契り十月とたぬうちに天下亂れて宮は土佐の國の畑といふところへ流されの御身となつたのである。よしや涙に見る配所の月であらうとも、竝びてあらば慰むすべも、宮も迎へたく御息所もともに行きたく思召しながらも、はるかに遠く戀しき思ひを託ちたまふよりすべもなかつた。宮の警固は有井の庄司とて情ある武士であつた。御息所の御迎へにとて宮の隨身秦の武文をおつかはしになることをお進めまをした。其嬉しきはからひに宮も御息所の着給ふ日を武文の出立ちし日から指をりかぞへて待久しくお思ひなされてゐた。武文は庄司の進めたる御衣一襲を持ちてひたすらに都へといそいだ。ありし今出川の御住居へとさしてゆけば、表門も裏門も閉されたまゝ、道もなきまで八重葎が生ひ茂り、つたかづらは武文の訪ふをゆるすまじきさ

まに厳しくとざしかためてゐた。武文は御息所の御隠家はいづれかと洛中洛外を足にまかせて探ねあるき、漸くに嵯峨の奥深くにおしのびあるのをさぐりあてた。

土佐の御配所からお迎ひに武文が上りしと聞くだけにて御息所の日頃御惱みのお胸は開いたのである。君あらばいかなる邊土鬼の住む島たりとも都にもまさるところと、御息所は御支度をもそこに何もとりあへず武文を従へて急がせられた。攝津の尼が崎といふところにて渡海の順風を待つうちに筑紫人の松浦五郎とよぶ無頼漢のために見染められたのが、またしても大きな障りとなつて待焦る、御仲の妹背は引別れなければならぬ運命に立至つたのである。

運命の神の翻弄——悲しき物語はまたこの條から巻をあらためて綴り直されるのである。宮と御息所とは思ひに思はれる相愛の御仲らひであ

るのを妬心深い運命の神が呪ひ妬むのであらうか逢はうとすれば引離されるやうなことの味がつく。ことにこの度のこそは御息所の大難であつた。秦の武文が忠義心の厚いものでなかつたならば御息所の御身はとうなりはてたのか分らぬほどの災難であつた。

醜の夷の垣間見

松浦五郎は見染めたる上藤が一宮親王の御息所であつて御忍びで土佐の國へ御渡海の途中と聞知ると御供には隨身の武文よりほかに手ごたへのある男子はなしと見極めておのれが郎等三十人あまりを召具し御息所の御旅宿へ夜ふかく火をつけて亂入し御息所を奪ひいださうと計つた。武文は御息所を奪ひとられまじと悪戦苦闘のかぎりをつくし血をしぼり力の限りをふせぎ戦つたが身一人にては心ばかりはあせれども甲斐なく

討死をした。なれど無念の魂は御息所の御身に陰身のやうに引添うて守護したのであつた。筑紫船に捕はれた御息所は生きたる心地もなく船底にひれふしてゐたが武文の一念は怪異となつて船に附きまとい、大物の浦近くの沖あひばかりを船は廻りに廻つてゐた。その上ならず三日三夜さの荒れに一所より更に進みいでぬ船足におぞけだち貴人を取りし報いならんと五郎は御息所をなさけもなく海中に投捨てようとしたのであつたが便船した僧のとりなしによつて棚なし小舟一艘をおろし御息所を乗せて波のまにくと流しだした。

御息所のめされし小舟をば忠義の鬼となつた武文の一念が守つてゐた。さすがの大荒れにもつゝがなく流れながされて淡路の武島といふところにお船は無事に漂ひついたのであつた。島人にたすけられて御息所は死にたりとばかり思はれた御命につゝがなかつたことを審しいほどに生



られたのであつた。

つきせぬえにし

畑の配所におはします宮はまでどまで御息所の音信もなく迎ひにのぼせし武文も歸らず、ことに夜々の夢の破れがちにて何となく善き祥にはあらぬやうの御氣がかりにて、安き御心もなく日をお過しのをりから、あるをり下のものどもの語りあふのを聞くともなく御耳にとゞめられると、去年の九月阿波の鳴門にて船の梶にかゝりし衣は、内裏上藤などの田舎へ下らせられるのが、途中難風にあひて海に沈みはてしその装束にてはあるまいかといふのであつた。もしやと御心騒げば、其衣を見せよと取寄せて御覽あると、紛れもなく其品こそ潮にしみて色こそ褪せたれ、御息所の御料にと武文にもたせて出せし品ゆゑ、御手に取上げられると二目とも御覽なく

目に押し附けて涙をそゝがれた。せめてはこの衣の船の梶にかゝりし日をこそ忌日として廻向したてまつらんと、經を書き、藤原氏の娘、秦の武文、南無生靈頓生菩提と涙ながらに唱へては海に流された。やがて先帝再び隠岐の島より都へ還御なり、宮にもめでたく御歸洛のおよろこびがあつた。さりながら、待つ人はなく、戀しさにたへてよび迎へた途中の不慮のため、生きてふたゝび逢りあふ春のなき御心には、館にいらせたまへば、猶更何を見るにつけても、ありし日を忍ぶ御涙せきあへず、世のなかはゆすりてめでたさを祝ひことほぐなかに、宮の御心中のみは笑ものぼらす、濡りがちに世を憂きものに思されてゐた。そのうちに、淡路の武島といふところに、心細けに生きておはするといふ風の便が通つた來た。よくこそ生きてありしよと思ふにつけ、今まではをしくも思はざりし、我命を捨てなかつたことを宮は嬉しく思された。まして御息所のよろこびはどれほどであつたらう。

急ぎ迎へられて歸るや、宮の御胸にすがりつきて、今よりは暫時も離れては  
 るまじと泣きかはし、笑みかはして、悲しくもあれど嬉しくもある世ぞとつ  
 きぬ御物語も、昨日のやうに思ふうちに、日は飛びすぎていつた。かたみに  
 離れじはなさじとのむつみも、三年とはたまたまず、建武元年の冬より又天下  
 騒亂し、宮は越前の金崎の城にて御自害をなされた。生別れの嘆きは、また  
 逢ふをりもありとさきのこと為例にひきて、宮は御息所をいさめはけまし  
 て御出陣になつたのであつたが、御自害あつたといふことが傳はると、御息  
 所は日頃の悲嘆と御煩ひとに、枕もあがらぬを却て嬉しく思召された。こ  
 の世にあればこそ打揃うてゐることにもかたひのであらう。常世の春にい  
 つまでもく、打くつろぎて暮さば、さぞな樂しからんと宮の御跡を追ふを  
 たのしみにして、御中陰の日とならぬ間に同じみちへと急がせられた。宮  
 の御首が都へのぼせられたときには、御息所ももう土となつて世にはおは

しまさず、天翔ける靈魂はいちはやくも宮の御傍へと侍いてゐたことであ  
 らう。

# 伊賀の局

## 楠正儀の妻

伊賀の局の勇力は吉野拾遺によつて傳へられてゐる。局は南朝の忠臣新田義貞の家臣篠塚伊賀守の娘とよばれ、これも南朝の大忠臣楠正成の子正儀に嫁した女である。吉野の行宮に仕へた女房で父の役名をとり伊賀局と召されてゐた。世は苜蓿の麻とみだれ天の下に輝く日の大御子が二柱おはしまして、空に日月のならんで出づるやうの有様のをりとして、世の中の騒しさに紛れ、ことに太刀をとりて争ふことばかりつゞきし人心の荒び

たるをりからとて、堂上の女性には珍らしかるべき局の勇力のことなども、ほんのすこしばかりしか事實が傳はつてゐないのを遺憾とするが、その當時の芳野の行宮のかなしき御有様なども断片ながら知るよすがに、もと伊賀の局にことよせて記して見ようと思ふ。

後醍醐帝隠岐より還御なり御重祚あつて、日の御座は臣下の者のいたづらに動し奉らるべき筋のものではなく、神代より傳はるべき御方は定まつて生れ出させたまふのであるといふ事を蒼人草の人民の輩も自ら知つた。それは延元元年春如月のことである。足利尊氏は弟の直義と兵庫においで既に自害しようとしたのを諫められ、船に乗つて筑紫まで落伸びたのであつたが、やがて勢ひを盛返へして、その年の五月には九州西國の兵を催して攻めのぼり兵庫に上陸した。懐中にはその前月に崩御になつた後伏見の院の院宣を持つてゐた。

そのをり新田義貞は山陽山陰十六箇國の管領を許され兵庫に陣をとつてゐた。尊氏が大舉して攻上るよし奏問に入ると正成を召されて義貞を救へとの勅があつた。悲しいことにはそのをり正成が奉つた策は御許容がなかつたので、正成は今度の戦こそ一大事であると奮戦苦闘して力盡き一族郎黨五十餘騎と共に討死をしてしまつた。そのをり十一歳になる正行を櫻井の驛から河内へ歸したのは人も知る有名な話である。この戦に引續いて頼母しき名和長年まで討死をしてしまつた。御隠忍と御苦闘の年月の好果が漸く熟しそめたばかりで、悦びの御まとるは散りぢりばらばらの御潜行で都をお出ましにならなければならなくなつてしまつた。東宮恒長親王は北國へ、その他の宮方もそれ／＼に御味方のものある國々へと向はせられ帝は潛に吉野へ御遷行の餘儀ないことになつた。都には尊氏のはからひにて後伏見帝の第二の皇子中頃の帝であつた後醍醐帝隠

岐へ流遷の御留守光嚴帝の弟宮豊仁親王をたてて光明帝の御即位があつた。

吉野行宮

權花一朝の夢とはいへあまりに甚しい御衰萎である。打つもの打たれるもの名ある人の多くが失はれた。一年にも足らぬ御榮えを悲み吉野へ心をかよはせる月卿雲客の多くも殺された。帝はそのをり吉野へおましになつたぎり再び京都に還幸はなかつた。行宮が終の御座所になつてしまつたのである。長くおとまりになるうちに自然と大内裏の莊嚴美麗さはなけれど吉野山の塔坊を九重の御垣として木の丸殿ではあれ里内裏のかたちは出来たのであつた。

局はこの吉野の宮居に御仕へまをした。准后となつた三位の局藤原の

簾子にかしづいてゐた。簾子は才色共に並びなき美姫であつた。はじめ西園寺相國の女中宮禧子の入内の時に引添うて内裏に參られたのであつたが帝の御所望によつて寵姫の一人となられた。數多い後宮の貴妃のうちでもこと更にお覺えめでたく恒良成良義良の三親王と二人の女王とおもちまをした。恒良親王は多くの兄宮方を越えて東宮に立てられた。(はじめ後醍醐帝御即位のをりは大覺寺持明院兩統かはるゝ御踐祚といふ取極めであつた。それがため帝の第一の皇子尊良親王は立坊にたたせられることが出來ず後二條帝の皇子邦良親王を立太子とされた。その後には後伏見の皇子量仁親王を立てられたのである)恒良皇太子は前坊の御位で亡なられたので、また此お腹の義良親王が東宮となられたのである。恒良親王は御兄一宮尊良親王と共に越前金が崎の新田の居城にお入りになつたが、金が崎が落城のをり尊良親王はお逝れになり春宮だけが兄宮の

お首と共に京師へおくられになつたのである。そしてお命を縮められたので義良親王が芳野行宮の春宮となられた。

諒 闇

延元四年八月十六日人皇九十五代の帝後醍醐帝には在位廿一年間の御艱難も治跡の残るものもなき御煩悶のうちに行宮に崩御あそばされたのであつた。建武二年の御製には、

身にかへて思ふとだにもしらせばや民の心の治めがたさを。

とお洩しになつたほど御苦勞を遊ばされた御一生であつた。山里の秋の風はや朝夕は身にしみるところとてふと御風氣にかゝらせられ御心地例ならずと見奉り近く侍るものがほどなくおなほりでござりませう。ほんの御風氣のことゆゑと申上げたをりに帝は

露の身を草の枕におきながら風にはよもと頼むはかなさ。と遊ばされた。それが御辭世となつて歸らぬ道においそぎなされてしまつた。

九重の玉の臺も夢なれや昔の下にし君を思へば。

引連れし百の司のひとりだにいまはつかへぬ道ぞかなしき。

帝をいたみてかく詠じた三位局簾子も決して幸福な身だとはかりは言へなかつた。天子の母となる至上の榮譽をうけて生れながら餘人の知らぬ悲嘆も多くうけてゐた。風のおとづれには彼女の持つた第一の皇子恒良親王は七月十三日に害されその悲涙のかわかぬうちに、次の皇子成良親王は十六歳にて七月廿一日についで世を去られたのである。二人の皇子に、まだ生先きの頼母しきほどを前立たれたほどもなく、御寵愛の身にあまつた帝にお別れまをしたのである。ことに御踐祚になつた義良親王は

まだ十二歳の御幼年である。忠臣のみが附従つてゐるとはいへ、宮居も假殿の山里御所のことである。敵は何時攻め登つて来ようもはかりかねる時節である。漸くこれが人世とおあきらめがつくと、

さびしさもつひの栖とおもふには心ぞとまる峯の松風。

と、先帝の終のおましどころのあるところこそ、我住むべきところと、山深くも淋しくはないと思はれるやうになつた。さうしたをりに、この伊賀局の仕へてゐたことは、どれほど心強く頼みに思したことか知れない。

御世代り

村上帝の御母とて簾子は准后となり新待賢門院となつた。先帝の八子で、まだ御幼少であつた帝は、

四の海の浪も納るしるしにと三つのたからを身にぞつたふる。

九重にいまもますみの鏡こそ猶世をてらす光なりけり。  
とおよみいでになつた。吉野にこそ三種の神器はおはしましたのであ  
る。その後にも、

曇らじと思ふ心よおなじくは、はや日のもと光りともなれ。

との御製もあつた。そのころ吉野の宮にとては参るものは山の法師ばかりであつた。雲井といへる名はあまりにふさはぬ閑居であつた。仕へまつる司人も数少きゆゑ除目昇進の式などは断絶に近かつたので常陸國にある北畠大納言親房は神皇正統記五巻を作りて獻じ、また次の年に職原抄二巻を作り奉つた。親房の博學は参考とすべき書の一冊もない東國にてこれらのものを著し、百官諸位の職掌をつまびらかにさししめしたのであつた。

十年あまりの歲月は吉野の山に、春は峯に尾に咲きつゞく櫻になぐさめ

られ秋はいち早く梢色つき都にはきかれぬ鹿の鳴音に涙をしぼる人々の上にも過ぎていつた。諸國にはその間も吉野の宮方と官軍との軋轢が勝ちつ敗れつしてゐた。正成の子の正行も弟の正時を連れて吉野へ参つて御守護をするほどの若者になつた。

物の怪

女院御所とよばれた簾子の住居は皇居の西の山つゞきにあつた。春のころから女院御所には化物が出るのと騒ぎおそれるたが、かたちを見たといふものもなかつた。大君のおましどころに近く左様な怪異の出る筈はないのであるが、それもこれも人氣すくなの假御所とあなどつて山に住む狐か狸がたぶらかすのであらうと言ひあつた。内裏よりも宿直人を多くおよこしになり、藝目を射させられたりした。そんなをりには噂もなく

なつてゐるたが六月十日あまりの暑い夜に伊賀局は寝ねがてにして、ただ一人庭へおりたつてゐるたが月の出るさまのうつくしさに、

すゞしさを松吹く風にわすられて袂にやどす夜半の月かけ。

と聞くひともあるまいと口ずさんでゐると、その松の梢からひからびた聲で、

(ただよく心静かなれば則ち身もすすし)

と古き詩の下句ばかりをいふものがあつた。局は不思議なところから思はぬ句を聴かせるものだと思つて、梢を見上げると、そこには世の人でない怪異のものがあつた。鬼のやうで翼のあるものに、眼は月よりも光つてきらめいてゐた。心強な局はそれを見出し、驚きもせず、これこそ例のならんと思ひながら打笑つて、

「なるほど誠にさうである。それはさうとして、何者であるか怪しい姿で

はないか、名を名乗つたらばよからうに」

と言ふと、怪異は、

「某は藤原の基遠である。女院の御爲に命を奉つりしに、せめては無きあとお申ひくたされてもよからうにとの思ひに、こんな罪深いさまとなり果て、苦しさいやまさればこそ恨みて此春ごろより後の山にゐる。けれども御前には恐れ多いと思つて参らぬのゆゑ、どうぞこの事を申上けてくれ」

と言つた。局はさうときくと頷いて、

「それはお恨みまをすのが悪い。世のみだれに種々と思召すことが多いので、つい過しておしまひなされたのである。其事だけならば聞えあけよう。葬うてやるには御經に望みがあるか、あるのならば心にまかせてあけよう。」



「その事ばかりがお願いである。御弔ひは法華經にしくものはあるまい。さらば歸らう」

と怪しきものは松の梢をはなれようとした。

「歸るところはいづくぞ」

と局がとふに

「露ときえし野の原にこそ亡魂はうかれ候へ」

とばかり答へて北をさして光りを曳きながら消えていつてしまつた。

其後を見送つてもはや迷うてはこぬであらうと光りの末を眺めてゐた局は、夜陰ではあつたが女院の御前に出た。そして怪異の述べたことを啓するど、

「忘れるともなく誠に思ひ忘れてゐた」と御意になつて翌日に吉水法印に仰せつけられ御堂にて三七日の法華經の御供養があつた。そのことがあ

つてから一しほ局の物に怖ぢぬ振舞を頼母しくおぼされた。

辨の内侍

内裏こそ假宮なれど吉野山の塔坊は昔ながらに莊嚴華麗で、溪間峯々に僧坊はあつた。ことに藏王權現は役の優波塞の行基このかた靈驗あらたなるきこえあり、大堂金堂玉を磨き南の方には金剛力士の立たせる二階門あり、東に救世觀音の御堂あり、西の方には阿彌陀如來の御堂がある。その中でも由々しき輪奐の美は日藏上人が冥途にて延喜の帝の勅をうけたりとて、此處に造營あつた大威徳天神の御社であつた。それを守護するものは山法師達であつたが、いと廣き領域のこととて手ぬかりのないでもなかつた。京都方のものなどが折々忍び込み掠めるのも餘儀なかつた。尊氏の昵懇な執權高の師直は好色のきこえ高く、この行宮に辨の内侍とて美し

き聞え世に高き女を何處にてか見初め、いかにしてかさがし出さんと思ひあせつた。この内侍の母上は繼しき仲であつたのでその人をかたらひ、内侍を盗みいださばよくして差上げようと慾にさそつたのであつた。繼母は内侍の手許につかへたことのある梅が枝といふ侍女に言ひ含め、内侍を行宮から引出す手筈をさだめたのであつた。繼しき母北の方から山里の住居はさぞわびしい事であらう、久しく見ないので案じられる。住吉までお詣りに来たから、道のたよりもよいゆゑ、逢ひに来てくれと珍らしく優しい文をよこした。そして河内の國の高安のほとりの知己の許で待つてゐるといふことを梅が枝からも言ひそへさせた。内侍は誠の母にもまさるお情け深い思召しだと思ひ、お許可を受けて女房二人、青侍三人を供に連れて出られた。梅が枝と心を合せて師直の方より入込ましたものは廿人ばかり道に待つてゐた。その者達は内侍の母君は高安にて待合すこと

はやめにして住吉にゐる故、そこへ伴ふやうに言つたとてお輿を取込めてしまつた。お供の青侍たちは心得ぬことに思つて御輿を引きかへさうとする。師直方のものはその三人の青侍を斬殺し、内侍のおそれまどふのもかまはず、早く住吉にゆかねば師直が待兼ねてお出だらうと罵りながら急がせた。河内の國の石川といふところまでゆくと、丁度吉野の宮へ召されて参る途中の楠正行が其處を通りかゝつた。輿のうちから泣く聲の洩れるのを審しと思ひ、おして近寄つて問へば、内侍は泣く／＼、供のものの殺されたことなどを語つた。正行は手の者に怪しき供人達を召捕れといつた。師直方のものも恥を知るものは抜合せて戦ひ討死したが、その他のものは召捕れ後に斬られた。梅が枝だけは尼にして心歪んだ北の方にこのなりゆきを知らせたがよいと追拂はれた。

如意輪堂

正行のはからひがわるかつたらば辨の内侍は安くては居なかつたであらうと内侍を妻に下さるよし仰せいだされたが正行は  
とても世にながらふべくもあらぬ身のかりのちぎりをいかでむすば  
ん。

との一首をもつて御辭退した。その後ほどもなく二年とはたぬうちに正行は戦死した。多病の身の君の御役に立たず病死するやうなことがあつてはと兼て心懸けてゐたが父の智力を受傳へた彼は何時も連戦連勝をしてゐたのであつた。しかるに正平四年正月二日の戦には敵方は山名時氏細川顯氏高の師直師泰の大軍が向つて来た。今度こそ命をもつて奉公するをりであると正行は思つた。弟正時をはじめ手勢を引具して最

後とおもふ参内をした。そして如意輪堂の壁板に一族四十三人の名を記しといめ。

かへらじとかねて思へば梓弓なきかすにいる名をぞとゞむる。  
と矢簇をもつて書残しおき飯山のふもと四條畷にて廿六歳を一期に戦死した。師直は勝ちにのつて吉野まで攻入り火をはなつた。行宮の内裏は炎上した。帝は山つゞきの加名生山へお逃れになつた。

その騒ぎはあまり急であつたので女院のお方にははかしくしい侍は一人もゐなかつたのである。局は先に立ちて女院をはじめ後宮の人々を連れ出した。燃上る皇居をあとにして路もない山路を走つた。あてもなく行くほどに行手には吉野川の橋けた一間ばかりを押流してしまつてあつた。これではまた以前の路へ歸り敵の手中へおちいるよりほかはないと呆れ惑ひ泣くばかりで思案のあるものは一人もなかつた。局ばかりはそ

の中に毅然としてゐた。この方々の御命は、いまは我身ひとつにお引受けまをしてゐるのであると、勇氣を振り起して、そのあたりの松櫻の大枝を引き折り、くして人達を渡すだけにし、目も眩むやうな山川の急流の上を行きかへり、くして女院をはじめ多くの女性の手をひき背負ひなどして渡らせ、漸くに人々を安全の地にうつした。

### 仇なる花はなほ残れども

ともかくも内裏は炎上してしまつたので、加名生山に假の御座所をしつらふことになつたので、淺間なる宮居はいやさらに旅居の御様になりはつた。局の勇力を帝にも目覺しくお聴問になつて、その時の樹々の大枝を取りよせさせ、園部六郎といふ勇者に折らせて御覽になつたが、とても局の力にはかなひやうがないのでお止めになつた。

加名生山の假の御所におはしましても、女院は先帝の御陵の御事ばかりがお氣にかゝつた。三月十日ごろ御参詣のためにと御陵の御山に登られると、ありし皇居のあと、蔵王堂も他の坊も燃盡し、燒原になつてしまつてゐた。陵近きところの花ばかりは昔ながらに咲きそめてゐたので、

みよしのは見しにもあらず、あれにけり仇なる花はなほ残れども。

と御述懐あつて去りがてに忍びかねておはしました。この金峰山塔の尾の御陵は如意輪寺の堂の後方にあたつて、北面の陵である。御陵は南面するものであるのをこの帝のは遺勅によつて北面になつてゐるのであつた。栗田の久盛といふ武士は、陵近くに千本の櫻を植ゑようと思ひ、たち年に植増していつた。そして、

植ゑおかば昔の下にもみよしののみゆきのあとを花や残さむ。

と讀出て奉つた。かくして十年ばかりの後女院はおかくれになつた。

御年齢は五十九であらせられたが、村上帝はお悲みのあまりに喪服を三年の間纏つておいでになつてゐた。三年の喪はてし五月五日に前大納言實爲に賜はるとて菖蒲につけて、

今更にねにこそたつれみとせまであやめも知らで過ぎしかなしさ。  
とお読みいになつた。局はそのころ、忠臣の家楠の根の残り止まる

正儀に嫁してゐた。

# 慧 春 尼

## 發 心

いま此處に記さうとする慧春尼について、その前生涯がどういふきは人物であつたか分りかねるのを残りをしいことに思ふ。尼は年齢三十を過ぎてから出家した人である。しかも桑門の記録をたどり見ると特に容姿絶群といふことが記されてある。その美しい人の三十過ぎるまでの生活にはなにか鮮明なものがなければならぬ。まして出家の後の氣魄のすぐれてゐたのからおして見ても尋常一様な生きかたをしてきたものと

は思はれないのである。沸々と煮沸るやうな血潮を盛つて人生を突きぬいて進みでたものか、または秋霜のごとき厳しさを持つて冷然と生活の矛盾を見透したものでか、いづれにしてもその生立ちと悩み多き青春の頃と、悟道に入らうとした前提の道路がなければならぬやうに思はれる人である。たゞ尼僧となつてからの名があまりに高く知れてゐるために俗の者のことを委しくしないやうな傾きのあるのは残念である。

この尼を前出の千日尼の性格とくらべて見ると、温情春のごとき他方本願念佛宗の在俗の尼僧と、嚴冬の早昧さくく、と霜柱を素足に踏んで立つやうなきびしさ凜々たる禪門の尼とのけぢめが、ともに女性の持つ誇りとして尊いものであると思はれる。

この尼が出家したのには他に動機があつたのであらうとは思はれるが、その道に導かれやすかつたのは兄に了菴和尚があつたからである。了菴

和尚は曹洞宗の僧侶であつて相摸の國小田原の最乗寺に住してゐた。最乗寺は曹洞宗の名刹である。妹の慧春尼はおなじ國の糟谷といふところに住居し藤原の俗性をよんでゐたが、さりとて肉身の血脈は出家した人をも矢張り兄と呼んでゐた。尼は得度を思立つたをりにも他へは行かず了菴和尚の前へ出てその志望を語つて法弟とすることを許されるやうに願つた。そのをりを了菴は妹の顔をつくづくと眺めてゐたが、ほんの座談のやうに聞流して、

「どうして、出家するといふことは大丈夫のすること、子供や女子たちにはとても立ちにくいもので、なま易しい心持ちでは流れていつてしまふ。だから、手軽に女人を得度させて法門を汚辱すものも多いさ。」と軽くそらしてしまつた。妹はひとことの言葉がへしもせず、だまつて兄の和尚の顔を眺めてゐたが、その前をしりぞくと庫裏のはうへいつてし

まつた。

(彼女もちと強情だがなるほどと思つたと見えるな)

そんな風に了菴和尚は考へてゐた。いま面前を下つていつた妹の辭色が穩かで極めて平然とおちつききつてゐたので次におこつてくるやうな事があらうとは思ひもかけなかつたのであつた。了菴は妹が出家したいといつた事などは、いつの昔か聞いた事のやうにさらりと忘れてしまつて書見に餘念なかつた。

美しくしき頬に烙印

暫時するとまた前へ來て靜かに坐つたものがある。了菴が目を上げて見ると妹であつた。

「なんだ何か用か？」と言つたときに妹は爽かな聲で、

「先刻とおなじお願ひで」とおちつききつて答へた。

「またあの事か？」

了菴がふと妹の顔を眺めると美しい頬には横たてて十文字に火傷のあとが烙いてゐた。

「強情な奴だな」

了菴がかう言つたのは稍間があつた。

「させてくださりますか？」

「よいわ。」

此度は了菴が立つて庫裏へいつた。庫裏の大火爐には火が盛んに熾つてゐた。そしてまだ冷めきらぬ焼火箸が灰に差してあつた。兄と妹とが連立つてくると、其處に秘めてゐた僧侶達は思はず片唾を嚙んで二人の顔を眺めた。兄妹とも平常の通りすこしも昂奮の色がなかつた。兄妹は

また無言で連立つて兄の居間までかへつてくると、  
「仕方がないわ」と已を得ぬかのやうに兄は許しを與へた。

機鋒俊敏

剃髪を許された妹はやがて法名を慧春尼と授けられた。かくして後の  
尼の勇猛心は忽ちに法の源に徹することを得た。ある日最乗寺の雲衲が  
擧つて了菴和尚を圍繞して教へをうけると、了菴は巴陵といふ僧にむか  
つて問うた。祖意と教意とおなじきか別かと。

「鶏は寒くして樹に上り、鴨は寒くして水に下る」

と明かに巴陵は答へた。言下に尼にむかつて、

「尼よ、一轉語されよ」と言つた。

「賢臣は二君に事へず、貞女は二夫に見えず。」

倏忽に慧春尼は流水のごとく答へた。了菴和尚も尼がかいなでの悟り  
ではない事を肯じた。その後の慧春尼は機鋒當るべからず觸るれば切る  
の概があつた。最乗寺の尼の名は宗門に高きこえ渡つた。

その當時鎌倉の瑞麓山圓覺寺は臨濟禪の巨利で常に一千人の大衆を満  
し、龍象雜群するの觀があつた。それゆゑに諸方の寺院から使ひするもの  
は、大氣宇の者ならでは其門に登るのを憚りひそかに恐れをなしてゐた。  
時しも了菴和尚は圓覺寺に使ひを出さなければならぬ所があつたの  
で一人の雲水をつかはすことになつた。さてその使ひには誰をかと物色  
されたをり、一山の衆みな役目を難しとして尻込みをしてゐた。慧春尼は  
誰も引きうけぬのを見るとすゝみ出て自分がその役目をはたさうと申し  
出た。

「おぬしゆくか？」



兄の和尚は姉の尼を見てゐたが、では頼まうかのと言つた。

山門問答

鎌倉の方では小田原の最乗寺から使僧が来るといふ事を聞いて誰がやつて来るだらうかと待つてゐた。すると来るのは名高い崎俊な慧真春であるといふことが知れたので、そりやこそとばかり手具脛をひいて待ちかまへてゐた。これは當に不意に出て慧春尼の機鋒を挫折してしまはなければいけないといふ相談もなつてゐた。愈々其日になつて尼が階段を登つてくると、待設けてゐた衆僧のなかから一僧がついと前に進みいで慧春尼の前にひたと立止り、憚りもなく裳裾をか、け見せて、

「老僧の物三尺」

といつた。と見るとすこしの躊躇もなく尼もまた下袂をとりもち、陽陽

としたる面持ちはれやかに、

「尼が物底無し。」

と平如として佇んでゐた。大衆もまた聲を呑んで、鎮りかへり、禮なき僧は恐入つて引下つてしまつた。使僧の座定まつたときは圓覺寺の堂頭は侍者にむかつて尼に茶を點じてまゐると言ひつけた。すると、これもまた工んであつた事と見えて茶は澡盤に酌んで持ち來られた。そして尼の前に差置かれると尼は一禮して受けてのち器を轉じて堂頭の前に進め、

「これは和尚の御常用の茶盞と見受けまします。どうか和尚がお喫み下さ

い」

悠揚として迫らぬ態度でありながら尼の言葉のふしは厳しかつた。それには流石の堂頭も答へることが出来ずして茶は取下けさせることになつた。一事物々がみんなさうした有様で尼は首尾よく難關を潜りぬけ寺

用を滞りなく達し得て歸山した。それからの慧春尼の名は了菴和尚の名を知らぬものでも、最乗寺に有名な尼僧のゐるといふことを知るほどに振つた。

赤裸々淨洒々

もとより尼となる當初、その形骸を土木に等しとはしたれど、それは本来の空としたるにはなきゆゑ、尼の意志は堅けれど見るものには矢張り一個の貌美き女性であつた。奇を好むは人間の癖なり、ことに犯しがたしと知れば猶更に思ひの募るは弱き人情のならばしである。まして慧春尼の美しさは兄の了菴和尚さへその爲に出家得度の邪魔であらうと思はれたほどであつた。我に誘ふ心はなけれど落花はしきりに流水の情をほのめかした。ある一人の僧は思ひあまつたまま尼にむかつて切なき思ひをひそ

かにあかした。尼はそれを打明けると怒るかと思ひのほか、面もあからめず、

「左様なことは易い事ではないか」と恬然として答へた。

その答へに有頂天となつた僧は慧春尼とて、いくら傑物であらうとも生きてゐる人間のこと故矢つぱり女子の情は解してゐると思ひよるこんでゐた。そして禪僧の徹底した心理から考へて、破戒無慚と思はれるやうな事もなんでもなく交渉が進められたのである。魂も肉も共に觸れあふときは何時かといふことなども遠慮なく持出された。

「何しろ私にしてもお前にしても坊主のことだから尋常のところでは縁を結ばうと思つてはいけない。けれども、その時になつてなしがたいことだと阻むやうなことがあつたり、約束を破るやうな事があつては困ると思ふが……」

慧春尼は何か心に慮ることがあるやうに約をたしかめようとする夢中に熱した僧は一議もなく誓言をたててしまった。

「そんな事があつてよいものか。貴尼が拙僧のいふ事を諾つてくれさへすれば拙僧においては火の湯にはひるのも辭はない。まして其他のことなんぞ言葉をつがへるまでもない」

それを聞くと尼はにこくと笑つた。對手の方では嬉しくて笑つたものと思つて、これもにやりとして立別れた、それから間もないある日のこと了菴和尚の上堂には一山の大家が雲集した。その時慧春尼は身に寸絲も着けず衆中に出て、高聲に約束をした僧の名を呼上げた。そして、

「さあ約束をはたしませう。早く此處へ来てお前が思ふままにしたらよからう」と言つた。

その有様を見ると火の湯の中でもと誓言をたてた僧は赤くなり青くな

り、やがて座に居たたまれなくなつて逃出し潛かに山を出て失走してしまつた。

火 定

あまりに峻棘にすぎるかと思はれるほどの尼の性行は、晩年になつて自ら火定するほどの剛毅な質となつていつた。尼は山下に庵をいとなみ往來に湯茶の接待をして暮してゐたが、それが積蓄した多年の懸案であつたか、それともふと思ひたつたことであつたか薪を積んで最乗寺の三門前の磐石の上に柴棚を組み作りあがると自ら火をとつて薪に導き火焰渦巻くなかに入つて自若として入定した。了菴和尚は妹の尼が火定に入ると聞くや來て禮拜してのちしづかに、

「尼よ、熱いか」と問うた。

慧春尼は兄の和尚の問ひに煙りのなかから答へて、  
 「冷熱は生道人の知るところでなし」と言ひ終つて寂した。  
 一山の大家は集つてその骨を収め攝取菴に葬つた。三門前の火定石は  
 今も最乗寺に残つてゐる。

# 津田勝子

## 草笛の音色

謎の操り主不可思議な傀儡師は人間を人形のやうに操り舞はす。この  
 悲劇の一場も天地の広い舞臺の一隅に演じられた一小戯曲である。  
 元龜のころ尾張岩倉の城の主であつた織田信行といふ武士は、そのころ  
 隣國に威を振ひ、晩年に右大臣となつて天下に令した織田信長の弟であつ  
 た。彼は剛毅の將信長の弟ではあつたが將たる名器であつたかどうかあ  
 まり武威は張り得なかつた。信長からは附家老として佐久間七郎左衛門

を遣はしてあつた。この七郎左衛門は信長の旗下のうちでもことに強情我慢のきこえある北國の荒大名の一人佐久間玄蕃盛政の弟であるのを鼻にかけて、とかく信行に對しても傲慢な態度をとり、兄の威勢を笠にきる慣れものであつた。

信行にはお氣に入りの近臣があつた。名は八彌津田といふのが姓であつた。まだ若盛りの八彌は見るからに凛々しく、氣品あつて顔姿も端麗な若者であるうへに、文武の道に達し、忠義の志も厚いので、信行は二なき腹心の者といつくしんでゐられた。八彌はまた信行を世にも代へがたい大切な主君である、いざといふをりには身代りに立つのは自分より外はない。同じ君臣とはいへ、他のものと自分とは競べものにならないほど恩義の深い縁も深い主君であると思ひこんでゐた。そのことについてもひとつの小挿話があるのであつた。

八彌は生れからの武士の子ではなかつた。名もない農家に生れて、生立つにしたがつて里の子がするやうに自分も牧童の仲間にはひつて働いてゐた。冬は山に登つて枯芝を蒞り、夏は野川のふちに水草を抜き、籠に満しては牛の背につけ、我背に背負つて幾里かの道を野原と村里へと行來して、それを生活のたすけとして、日をおくつてゐた。ある秋の日、信行が領内の野道に馬を打たせながら、四邊の秋色を愛でて行く、と打顔ふ草笛の音が、づこからともなく聴えて來た。信行は立ち去りもせず、その笛の音に聴入つて、馬を止めてゐると、草吹く風の野の聲かとばかり、空も地も木立ちも小河の流れも、うるみむせぶやうに耳朶に溶け入る妙音は次第に近づいてきた。いかなる者のすさびにかと、信行主従が待つ間もなく、その笛の主は其處に佇む四五の騎馬の主を御領主とは知るよしもないので、思ふまゝに吹きすさみながらその前を通り過ぎようとした。見ればまだ十三四の童のしか

も草刈り牧童が小山のやうに黒牛の背に積乗せた苧草の上にもたがって、餘念もなく竹に心を打込んでゐるのであつた。

見出された牧の子

「汝はこの里のものか？」

信行は家臣達をおしとめて、自身に聲をかけて機嫌がよかつた。牧童はふと見ると立派な武士を取廻して侍臣達がいかめしい顔附きをしてゐるので急いで牛の背から——草のなかから轉がりおりた。

「そのやうに狼狽せずともよい。無禮など咎めはせぬから」

信行は鷹揚に言つて自身も馬からおりたち、丸くなつて地面におじぎをしてゐる牧童の背の上へ優しい言葉をかけた。

「お前は中々笛が上手だ。私はお前の笛の音を聞いたので大變懐しく思

ふ。なんだかお前は私の領地へ——この里へ降りてきた空の子のやうだ。お前の吹く笛の音が秋だ秋が来たといふことを私の領内一ぱいに吹き響かしてゐるやうな気がした。私はほんとに好い氣持だつた。どうだお前は空から吹きおりて来た子供だらう」  
その時に牧童は羞明しさうに顔をあげたが

「いゝえさうではございません」と言つた。

「私は御領内の水呑百姓の家に生れたものでございます。毎日々々野へばかり出てゐる童でございますが決して空から降つて下つたものではないでございます。決して怪しいものでもございません證據にはこの笛を御覽に入れます。この笛は太郎兵衛が裏の背戸藪で切つたので私の手細工でございます。嘘でないことは村のもの誰れにもきいて見て下さいまし」

臆面なくさう答へたをりに、その主従は顔を見合せて莞爾と笑つた。そしてこれは興があるといつたやうに皆が腰をおろした。無論信行は床几をたてさせてくつろいだ。牧童の方では何事かはじまるのかと、眼を圓らにして見廻したが、人々の顔色に邪心のないのに安心を與へられ、自分もまた小さな足を出して前に組んだ。

落日に近い日は遠山の端にさしかつてはるるが、澄みわたる青空に光りをはなち、この野のはての並木路には木の間を斜に赤々と照つてゐる。丸くなつた主従と牧童との後景には、赤とんぼの飛びかふ野が廣々と展げこんもりと森や木立のあるところからは炊煙が白く立ち昇つてゐる。繫がれた馬は鼻頭をよせて尾を振るのもあれば腹を軽く蹴つてゐるのもある。放されたままの黒牛は、かさのある背の荷も苦にかけず香気な眼附きをして首を振つてゐる。牧童は安坐のままで眼を細めながら自慢の草笛

の音をきかせた。

其日から武士に

「どうだ今日から家臣にならぬか？」

「なつてもようござるが名がない」

「よし、姓名はつけてやる」

そんな會話があつて後早速御家來の一人と一足飛びをした牧童が津田八彌である。八彌の學問才藝武術は、もつて生まれた器量とはいへ、みな我君に授けられたものと八彌はそれらを主君からの預りもののやうに思つてゐた。年を経て愈々殊遇の加るにつけても、さう思へばこそ八彌には慢じた色もなければ、籠に驕る様などは微塵もなかつた。

かくて幾年戦國にあつては珍らしい小閑の日がついたある秋の一夜、

月見の宴が催され表奥のへだてなく席につらなつて信行の心持ちを豊かにくつろがせた。信行の傍には八彌もゐるたが七郎左衛門も居並んでゐた。信行はかういふをりも他のものに擡でてるる八彌の威儀ある男振りを中心かによるこんでゐた。そのをり信行の目にふれたのは奥方の腰元勝子の容色であつた。

良夫をとらさうと

勝子は京都に生れたこととて姿かたちも温雅であつた。顔立ちも一人立勝つて美しかつた。その宴の席に出ると誰も彼もが彼女の美しさに目をつけた。信行が氣がつくまへにとくに七郎左衛門が目も離さずに眺め入つてゐたのであつた。それと知らうやうもない信行はふと勝子に氣が附くと間近に呼寄せて、

「勝、今宵はお前に悦ばしい仲立ちになつてとらせよう。お前にとつてこれほどの良夫はなからう。」

信行は無上の好機嫌で八彌を召して、自身に勝子の手をとつて八彌の手へと渡された。座にあるものは歡聲をあけて主君の所置を讃へ、面目をほどこしたとはいへ目も炫つくやうな輝かしさに、顔を赤らめてゐる二人にむかつて萬歳千秋と壽いだ。ところがその時たゞ獨り苦々しげに口を嚙み唇を反してゐたものがあつたが、それが前に言つた佐久間七郎左衛門であつたのである。

かくて八彌と勝子とは公然主君より許された許婚の仲となつたが直に婚儀をあけるといふまでには至らなかつた。妻である夫であると思ひながら奥と表に別れて、一層に主家の恩義をおもひ互に忠勤をはげんでゐた。さるにその年の冬のことである。八彌は御前をさがつて我家にと歸



つて来た。そして平常には考へもつかなかつた無妻の家の侘しさが思はれ何處からとなく迫る室の隅の小寒さに火桶の埋火を掻き熾しながら勝子を呼迎へるのが遅れてゐるいらだたしさを覺えた。奥方のお手許の御都合もあることとは知れど、かうした夜にこそ出仕した終日の勞苦を慰めてほしいと思つた。何時になく傍淋しく、その日までは戀ふとしてもなかつた婦人ではあれど、許婚された日から切々に戀しくなりまさつてゆくのを、殊更にその夜は戀心が寡りまさつて、思慕の惱みに寢もやらず夜を更し、あまり嗜まぬ酒をさへ獨酌に一瓶を傾けつくした。夜中すぎるころ隣家との間に出火が起つた。下僕達は戸を明け放したままで火の燃える方へと飛んでいつて火消しの手つだひに夢中になつてゐた。あんまり騒がしいので八彌も垣の外まで出て見ると、その機を窺ひつけ狙つてゐた賊どもが白刃を向けた。八彌は思ひもかけぬ狼藉に驚きながらも身に隙はなかつ

た。無手ではあるが門の戸を楯にとつて兎も角も敵の數を知らうとした。寒月は皎々と白刃を打振る者の上に冴渡つてゐる。一人二人五人六人と目ざとくも數をよんで隙があらば家のなかにとつてかへし槍なり刀なりを手にしてから目にも見せてくれようとした。そして前を防ぐに油断はないのであつたが早くも門内の小蔭に忍びこみ身を潜めてゐるものあらうとは知るよしもなかつた。八彌の不覺といへば不覺であつたが、八彌とて後にも敵のあるやいなやは突嗟の間にも見返つて見たのである。けれども悲しいことに其處には冴けき月の影はいたらず暗い闇が禍神に言ひつけられて八彌の目を噓りあざむいてしまつた。

## かなしき最期

發止と切りこんだのは前方の一賊であつた。つとその腕をとつて刃を

取上げたのは八彌であつた。得物を獲た勢ひと取廻く敵の怯んだのちに楯をはなれた八彌の後から卑怯にも隠れてゐたものが躍りだして聲もかけずに後袈裟に切りつけた。その痛手に屈せず八彌はよく戦つた。我爲ばかりではない妻のためにも生きなければならぬと思つた八彌は力をつやく限りを戦つた。

火が消えると下僕達はがやがや言ひながら歸つて來た。その足音を聞くと言ひ合せたやうに賊どもは白刃を引いて逃去つてしまつた。よほど狼狽したものと見えて小刀一振を鞘ながら残して落したまゝ、かくれてしまつた。二足三足其のあとを追ひかけたが深手に弱つて八彌は倒れたまま絶息してしまつた。白い白い月光は霜の上に眞赤になつて倒れてゐる悲しい姿をすつかり見て知つてゐるといはないばかりに守り照した。その悪い報知は曉方になつて勝子にも告げられた。極度の驚愕は彼女

を氣死させた。氣を張りつめて座にこそ居堪へたれ勝子の涙は絞つても絞つても袖に盡きようわけがなかつた。體中にある程の血潮は、みんな涙になつて流れ出してしまふやうに止度もなく流れた。そして其折から處女の童貞は先立ちし愛しき夫へと捧げられたのであつた。彼女の決心は堅かつた。女でこそあれ此仇をかへさずにはおかぬ夫の修羅の妄執をはらさないではおかないと心に誓ひをたてた。彼女は自分が指折りかぞへて楽しい家庭の日を待ちこがれたやうに屹度夫も待つてゐてくれたに違ひはないと考へるを殊更に憤ろしくなつた。どのやうな難苦をかしても草を分けて敵をたづねいだしこの怨みを報いようと八彌の墓前にも誓ひをたてた。もとより主君信行も勝子の志望の殊勝なるを助力たく思つてゐられた。

## 夫の仇は？

とはいへ敵とは誰を目差してよいか、普通一様の盗賊の所置でないことは誰が目にも知れたことではあれど、なんの遺恨であらうかは不明であつた。一日も早く亡夫の無念をはらさんと逸る勝子を引止めて、その真相を物色するうちに、ふとしたことからその敵が佐久間七郎左衛門であることが知られた。もとより其當時から七郎左衛門は出奔してしまつてゐた。八彌が殺された場處に取落してあつた一振りの短刀が信行の前へ差出されたときに、信行は直様この憎むべき仕業は佐久間七郎左衛門の所業だといふことを知つたのであつた。何故ならばその短刀は見覚えのあつた品であつた。昨日まで傍近く伺候した七郎左衛門自慢の差料である。そればかりではなく、その品は信行の兄の信長が佐久間立蕃に與へたもので、中

刀は正宗目貫は金の丸龍であることまで信行はよく知りきつてゐたのである。けれども軽々しくその品があつたばかりで敵は七郎左衛門だと斷じることが出来ない。勝子をおさへてはおいたものの、無論七郎左衛門の仕業であるといふ事は分つたので、七郎左衛門が失走後の在家を厳しく探ねさせてゐた。美濃に走つて齋藤道三に頼みこみ、客分となつてかくまはれてゐるといふことを聽出すと、信行からは鄭重な使者をやつて七郎左衛門を渡してくれといふことを懇ろに頼んだ。するとそれと同時に佐久間立蕃の方からは何處までも庇護してやつてくれと道三の方に頼みこんだので懸合ひはむづかしくなつていつた。

## つひに手がゝりを

風が吹くにつれ、雨が降るにつけ、何一つとして勝子の心を傷ましめない

ものはなかつた。冷たくふる雨は八彌が怨みの悲涙のやうに胸にしみた。悲しく吹く風の音は切ないさ、やきを聴くやうに堪へ難かつた。このやうな切なさを感じて生きてるより、此身も共にと思はぬ時とてはなけれど、せめて一太刀報いずば八彌の無念は晴れる折はあるまいと、それを勝子は惜しからぬ命を復讐の一念にばかり生きてゐた。七日々々の墓参には一刻も早く女夫の誓約を本願として妾を呼寄せたく思ひたまは、敵に早く廻り合させられよとばかり繰返してゐた。其志が通つてか五七日の近くに一人の賊が捕へられて来た。曲事は市中に火をつけたためであつたが、その仕方が八彌の殺されたをりの方法と似通つてゐるところから厳しく探ねられ召捕られたのであつた。そして糺明にあふと堪へ通せず、いつぞや津田の家の裏口へ火を點けたのも自分達の仲間の仕業であつて、その頼み手は御家老の佐久間七郎左衛門様であつたといふ事を残ら

す白狀におよんだ。

さういふ證人の現れたからには、もう一刻も安閑として日を暮してゐる事は出来ない、と押して敵打ちのお暇を勝子は願ひ出た。信行ももう引止めておく策もなし、表向きの懸合ひでは道三が横車をおして、とても引渡さうにもないので、懸念には思ひながらも勝子の出立を許すことにした。勝子は稻葉山の齋藤家の城中にこそ知己はないが、まるで頼りのないこともなかつた。彼女の叔父にあたる人が古くから美濃の國に住んでゐた。しかも稻葉山の山下近くであるよい便宜から、勝子はその家をたよつて出かけていつた。懐中には信行から下げわたされた敵の血潮を血ぬれといはぬばかりの例の正宗の短刀がある。伴つてゆく従者は八彌の家にある老僕で、何の用で勝子がさういふところまでゆくかといふ事は告げられなくつても知つてゐるものであつた。

## 惱める花

能ある鷹は爪をかくすとかいふ。まして勝子は優しき立振舞ひであり、小禽ならば鶯の妙音にもたとへやう美しきさである。それに物思ひを包んだ容色は惱める花の一層に人目をひくものがあつた。道三の孫にあたる龍興がある日放鷹の歸途に勝子を垣間見て侍女にほしいと言込んだのも無理ではなかつた。また勝子にしてもさういふよい機会を願へばこそ叔父の家には足をとめもしたのであつた。見出したものの歡びよりは見出されたものの悦びはどれほどのまさりであつたか知れなかつた。ましてさういふ内情のあらうとは知らぬ龍興は、左ほどまでに見出されたのを嬉しく思ふのかと、あはれさもそふほどに満足して道三の夫人の側近くへと勝子の身を託した。

子の奉公ぶりにそのあらうやうはない。彼女は出来うるかぎり夫人の氣に入るやうにと奉仕した。信實をもつて事につかへれば己にかへつてくるものも信實心であると悟つた彼女は、一念をはらすには何事にも赤心を傾けなければならぬと思つた。その心持ちですることには誠の籠らぬ筈はなく、忠義といふ的にはまつた行ひとなつてあらはれた。道三の夫人は幾日もたたぬうちに勝子でなければ日も夜もないもののやうに愛してしまはれた。そして勝子をよろこばせるために來年の春ごろ催されるはずの騎射のことについても物語られたりした。騎射の催しとは、犬追物や笠懸けの的などあつて互ひに弓術をあらそひ馬術を練る、武士の名譽名聞の争ひであることは勝子も知つてゐた。そのやうなをりこそ敵七郎右衛門も日頃の傲慢から人に後れをとるまいと競つて出ることであらうと勝子はその催しが來春あるといふことを聞いただけで胸を轟かし

てゐた。そのをりこそ、そのをりこそと彼女は思つた。七郎左衛門は争ひにおくれをとらぬやうにするがよい。自分は一期の思出である亡夫の敵打ちに、やはか後れをとるまいと思ひ念じるのであつた。彼女は何かにとよせて騎射の日の晴れの舞臺にのぼる面々の姓名を知つておきたいと思つた。それも首尾よく夫人の手許まで廻つて来た名簿の記録を見るこゝとが出来た。一番二番三番と繰つてゆくうちに十五番目の行にゆくと勝子の腫はうごかなくなつてしまつた。其番にこそ厚かましくも佐久間七郎左衛門の名は行々しく居据つてゐたのである。其日から勝子には、ただもう明春三月の一日があるばかりであつた。

規定られた人数は十五員である。而もその最後の十五番目が敵の七郎左である。中にはさまつた六人目七人目などでは見あやまちもあらう恐れもある。最後の止めが彼である。餘人に對してはすこしも危害の憂ひ

はなく、まつしぐらに最後の一人にむかつて打ちかゝり止めをさせばよいのである。それにしても、最後の止めとは首尾よく爲遂けるによい吉祥ではないか。其日こそ、そのをりこそ亡夫八彌の修羅の苦を救ふときである。と、さう思ふごとに彼女は身顛ひをした。そしてこの一念の通るをりこそ、昨今の馴染とはいへ、前世からの宿縁でもあつたやうに、優しくして下さる道三夫人にも別れなければならぬのかと心の和み氣のくづをれるにつけ、今更に世の名残の愁さと人世の痛さを思ひわびるのであつた。

### 本望の日

日は麗かに晴れわたつてゐた。人の心ものびやかに晴れ、しい笑みをうかべてこの催しの日の麗日であることをよろこび語つた。勝子の心中は猶更に一層のよろこびではあつたが、流石にしめやかな落附いたさわ

やかさであつた。勇みたつ心の下からは何となしに涙ぐましい心持ちを忍びかねてゐた。勝子には、かうした日の來たことは、日頃の願望ではあつたが、それよりもそれよりもかうした日を勇んで待ちまうけなければならぬ身の成行きを果敢なんでもゐた。夫の八彌さへあつた非業に死にさへしなければ、二人揃うた楽しい春なのである。晴れがましい敵打ちをしよりよりのやうな暮しをも二人でした方がどれほど嬉しかつたか知れないのである。けれどもかうした運命となつたのも、もとの起因は七郎左一人の悪心からであると思へば、又更に憎さが加はるのであつた。勝子にはどんなに待久しい春の日の長さであつたであらう。全くその前日などは一刻千秋の思ひに惱まされたのである。堪兼ねて託つやうにそれを言出すと、

「勝は見物したことがないので、どのやうに面白いものかと思つてゐる。」

荒くれた武者たちが騎馬の上から遠矢を争ふまでぢやに

と道三夫人に笑はれもしたが、いよく其日になると他の女子は化粧衣裝に騒ぎたち、好きな人達の品定め、浮立つなかに勝子一人ばかりは、きりりとした身姿何處やら凛々しく、潔よけに化粧しただけですこしも浮々したところはなかつた。かうした身仕舞は、騒動がしづまつて後になつて心あるものを領かせた。

### 櫻ふゞき

花は散る。吹雪と散る。その花片がをしけもなく吹き込む棧敷うちにあつて、勝子は今日こそ本望遂げたのちには、わが身も潔よく散らうと思ひさだめてゐた。見苦しくなき死こそ殊寵をたまはつた主君たちへの晴れでもあり面目でもあると思つた。八彌が死んだ後は、たゞ今日の日に逢は

うたればかりに生きながらへた命である。散ればこそ櫻はいやがうへにも美しいと考へてゐた。やがて合圖の太鼓が張り渡した遠くの幕のかけから打出され響きわたると、御簾をかけたつらねた棧敷の上でもどよめきだした。心のどめきは勝子こそ押隠されもせぬのであつたが、すこしでも人に不思議をたてられてはならないと思ふ杞憂が彼女の波立つ胸を押鎖めてゐた。

終に騎馬武者の最後の一人が名乗りをあける時が来た。十五番と數へるや御簾の隙から身を翻へして躍出たのは勝子であつた。

「めづらしや佐久間七郎左衛門。去年霜月汝が打つて退いたる津田八彌が怨みをかへす。亡夫の敵尋常に勝負せられよ。」

散る櫻のもとに花吹雪をあびて血振ひをして立つたのは勝子である。彼女の手には早くも飛降りざまに敵を疵つけたるかの正宗の短刀が握ら

れてあつた。

狼藉者といふ聲が其處此處で起つたが勝子の名告るを聞くと鎮まつて、その後の動靜をうかつてゐた。

助太刀もなかつた。しかし遮りとめる無法者もなかつた。棧敷の上でも鎮まりかへつて見物されてゐる。要所々々を固めたものもその成行を片唾を飲んで見護つてゐる。止めよと下知のないのは勝子にとつて何よりも味の味方である。彼女は一身を投げうつて敵に斬つてかゝつた。そして思ひがけぬ最初の疵が敵の油断と急所とを突いたので、案外容易く敵を仕止める事が出来た。勝子は手疵一つも受けずに七郎左衛門ほどの強敵を倒すことが出来たのであつた。

自害と覺悟をさだめてゐた彼女にも自儘な裁決は許されなかつた。齋藤家の迷惑になる事件でもあり、その裁決は道三の命令によらなければな



らなかつた。道三も勝子を見上げた者だとは思つたが、我目の前で、しかも晴れがましい場處で、佐久間立蕃から預りの客を、婦女子の手にかけて殺させたと云つては、我恥にもなる事なり、信長の顔をも潰すことになるからどうも助けがたいと言ふのであつた。勝子はもとより死をこそ願つてゐたのであつたが、道三夫人の身としては、助けたさが一ぱいであつた。一寸のびれば尋とやらいふ譬からこの場だけでも助けておけば、どうにか命乞ひの工夫は思ひつくことが出来ようと、この一夕だけの命を伸べてとひたすらに嘆願した。道三も夫人の悲嘆を見るに見兼ね、その奥の心をさとらぬでもなかつたが、願ひを許した。夫人は龍興と計つて、参州岡崎城内の大須賀康高の許へと勝子を逃した。

## 士道の犠牲

七郎左衛門が勝子に打たれたと聞くと、立蕃盛政の激昂は、主君の信長までを動かした。道三にむかつては何故勝子を逃したと、信長は談じこみ、信行はよく助けてくれたと、禮を述べ、岡崎の徳川家へは、信行からは頼むと申込み、信長からは勝子を引渡してくれと言込んだ。その使者として池田信輝が請受けに來た。それに答へて、家康がいふには、

「それはいけない。勝子は稀世の烈女ではないか。それを承知でそんな無法なもの達へ渡してやれるものか。考へても見るがよい。信長はあの勝子を請受けてどうしようといふのだ、無法者の女蕃の思ふ儘にさせようとするにちがひない。そんな事が出来るものか。それは譬ひ姻戚の親しみを絶つといつても聽入れられる筋のものではない。さうでなくとも勝は我に頼んできたものではないか、我は小國ではあるけれどそんな事で脅されて手放すと思つては困る。さうではないか？」

とて勝子を手放すくらゐならば戦場にまみえても苦しくないといふやうな口吻で断つてしまつた。信輝はさうした返事もしかねて困つてゐるうちに玄蕃の方では待ちかね家康に鼻をあかせようとの考へもあつて刺客をもつて勝子の身邊を附け狙はせた。さうまで附け狙はれて居ると知らぬ勝子はある日所用あつて他出すると、その轎と前後して怪しげな者の附けねらふ様子に氣がついた。氣附かれたと知ると其者達は理不盡にも打つてかゝつたが、さうもあらうかとの懸念から附けおかれた徳川家の侍臣たちのために二人の男は捕へられてしまつた。そして佐久間玄蕃の命で勝子の命を狙ふのだといふ事を白状させられた上に斬られてしまつた。二つの首は人目に觸れやすいところへ梟けられて、その立札の表には、

此者共佐久間玄蕃が命なりといへども、賊の偽言以て十惡をまぬかれんとするならん云々。

と書き記されてあつた。それを聞き知ると信長は烈火のごとく怒つて、信を絶ちてもこの儘には濟ませがたいと罵りやまなかつた。其事のよしを洩れ聞いた勝子は、自分の命一つで、而もをしからぬ餘命を人の厚誼の忝なさに生伸びてゐる時時の息を盗めばこそかゝる仕儀ともなれ、此上は死するとも人の温情を無視した罪とはならないであらう。時機を得て死なずば三方四方への不義理となる。いまとて二國の構へとなつてゐる。この時機を知らずば恩澤にむくゆるところを知らぬやうにて我志でないと思つた。その思ふところを書残して心靜に彼女は自盡してはてた。年は十九か？ 廿才を越したとしたところが多くは出でゐるまいと思はれるが、勝子のことはそれだけしか史のおもてに書止められたものはない。岡崎のあたりの古き寺院など探ねたならば或は墓所など残つてゐるかも知れぬが戦國時代の風習として名ある武將の墓所さへさだかならぬが多いゆゑか

ぐはしい情操の持主であつた美女の事蹟もまた世に知れぬやうになつてしまはぬやうにと書きつけたまでである。

芳春夫人松子

芳春夫人松子

戦國に生れて

元龜天正の戰國時代から豊臣氏の桃山の豪華徳川氏の榮華三百年の源泉であつた慶長元和の古へをかへりみれば誰か信長光秀秀吉勝家康利家と諸英雄の名を語らぬものがあらう。それについては當時の名媛——時代と親みの深い女性の名も語り傳へられてゐる。  
信長の妹お市の方とその子の淀君。光秀の室と細川忠興の夫人。徳川秀忠の御臺惠與とその女秀頼の夫人千姫——その女達はあまりに高名で、

美しく、あまりに傷しく悲しい運命であつた。正閨順逆の分明は徒らに此處にあけつらひたくはない。いづれの分ちはあつてもみな涙の女子である。戦國時代の婦人ほど、夫妻親子同胞の間にたつて血の涙を絞つたものはなからう。その中にも多くを世の中に語りつたへられてゐない豊臣秀吉の室北の政所高臺夫人の苦節と心事が悲しく傷しく偲ばれる。いま此處に傳へようとする小傳の主は、高臺夫人とおなじやうに其の名とその苦節とがあまり現れなかつた賢夫人である。芳春夫人松子とは、舊加賀百萬石の藩祖前田權大納言利家の室の名である。此處には芳春院松子の七十年間の存在を極く簡單に記さうといふにすぎない。嫁して夫君と共に住む五十年、十一人の子女を生み、二千貫の郷士から今日の前田侯爵家を生したてた幸福な夫人である。が、それは表からばかり見た一面であつて、どれほどの感慨を持つてこの夫人が此世を去つたかは、空しくへだたる三百

年の古時を知るもののみが酌知ることの出来る苦い半面であらう。こゝには無益な推測をゆるさず忠實に彼女の生涯を叙べよう。

尾張の國の清洲に織田信長が居城してゐたころのことである。信長の旗下の弓頭に篠原主計といふ侍があつた。妻は妊つてゐたが一人の娘を生むと間もなく夫に別れる日が来た。そのころのこととて土民は戦ひに勞れ、家を焼かれ、土地を追はれて塗炭の苦みに喘ぎ、生別を餘儀なくされるものが多くあつた。また侍は今日あつて明日を知らぬ、夜半の寢込みに攻立てられて、別れも告げあへず死別した。宵の一盞に日常の憂を拂つて、火影に笑みを交したのが、夫妻の永訣となり、昨日微笑んで子の後姿を眺めたのが、今日の永久の別れと、まことに常ないが風習のやうに、人の心も硬ばつて、苦い涙に馴らされた魂は、他人の子を害ふのも容易なものとされてしまつてゐた。主計も大概はさうした別れを妻子に告げたのであらう。その

人の子に生れたのが松子である。

生ひ立ち

天文十六年七月九日尾張の國海東郡沖の島に生れた彼女は、幾程もなく母に抱れておなじく信長の家臣である高島左京大夫の家に養てられた。松子の母が再嫁したので高島家の二女と彼女は目されるやうになつた。彼女の母の姉——松子の伯母は、松子の生れた沖の島よりは四里ばかり距り、高島の仕へる信長の清洲城からはさほどに離れてゐない、おなじ國の荒子といふ土地の郷士前田利春の妻となつてゐた。どういふ都合であつたか、松子は四歳になると母の手を離れて伯母の許へ引取られた。前田家にも多くの子女はあつたのである。六人は男子で二人だけが女子であつた。松子は當時の殺伐な男子の遊びを眞似て破魔弓等を持つて厭廻つた

ので、

「女子といふものはそんな遊びをするものではない」

と兄分の利家に戒められたりした。丁度松子が四歳で貰はれていつたをりに、その家の家督の息子利家は十三歳であつた。松子がまだ物心も知らないで貰はれていつた翌年の八月には、前田の家では中々の出来ごとがあつたのである。それは郷士の息子前田孫四郎利家が信長に仕へることになり、芽出たく祝つて初陣に出たのであつた。松子がまだ何事も知らないうで寢附くの後に姑となつた叔母の乳房を懐にさぐつてゐたとき、後に大納言の位と、百萬石の太守となるべき第一歩を、それも未來のことであつた彼女の夫が踏出してゐたのであつた。

利家は廿一歳の若武者となつた。孫四郎は又左衛門と成人名に呼代へられた。その折おなじ安土の城中にあつて小身者同士で、しかも垣隣の

木下藤吉郎の家では、又左衛門が望まぬでもなかつた福々と呼ぶ娘を嫁ることにした。又左衛門が據なくその仲人に立つたりした。又左衛門が、あぐりと明いた口は、自分の出し抜かれた失策を語りもしなかつたが、親達は氣がついたのであつた。利春は妻の姪を貰つたときから子供一人に配匹せる心づもりであつたので、なるべくならば利家にと思つてゐた。で、未だ十二歳ではあるが、身の丈けも大きく、骨も逞しく、肉つきもよく、發達して健かゆる妻入らしてもよからうと、隣家の藤吉郎に相談をかけた。こなたは些か義理の悪い思ひもあり、氣の毒にも思つてゐたをりもをりとして、早速に仲人にならうと言入れた。藤吉郎夫婦はこの仲人がせめて又左衛門に對しての詫心でもあつたのであらう。

木 權 垣

隣家同士木權垣からの出入りが日のうちに幾度となく往來されるやうになつた。夜となく晝となく心安く兩家からは小刀をさしただけで行會つた。そして思ひあつた夫妻の木下家の方へは子が出來ないで、松子の方へは翌年の初夏に初子が生れた。十三歳で母になり、又左衛門は廿二歳の父であつた。

十四歳で一人の娘の母であり、武士の妻である松子は、その年にはじめて武夫の妻の悲哀さを味ははなければならなかつた。五月間に而も大雨の夜に夫は主君と共に死の臍を固めて桶狭間へ夜討ちをかけ、今川義元を倒した。そして彼女は幼時に別れた父親の死を思出したほど、物心知つてからはじめて親の喪に服した。彼女には實父同様に親みのある夫の父利春が没したのである。

彼女もまたいつしかに成人になつていつた。十六歳には家督とする利

長を正月に生んだ。次の年には二女の肅姫を生んだ。そのころこそ人生の華の咲き開く時期でも年頃でもあつた。若き二人には良い日ばかりが訪づれて来た。主君信長の勢ひは増大してゆくばかりであつた。永祿元年に夫妻となつてから十二年目に利家は家督を相續して食祿二千四百五十貫を得ることになつた。其年も終つて翌元龜元年春には長濱一萬石を領することになつた。翌々年には府中三萬三千石に封ぜられ、三女摩阿を備けた。天正元年には母よりも長くその女の懐に育てられた姑である叔母に別れた嘆きはあつたが、織田家の威は隣國に振ひ、主家の智將である木下の家とは兄弟とても及ばぬ交友ではあり、若き夫妻の上には輝かしい日の光りばかりが照り渡つてゐた。四女豪姫が生れたをりには、まだ出生せぬうちから木下夫婦が詰めかけてゐて、

「男子でも女子でも、今度こそ生れたらば私達の子にする」

と附ききりてゐた。誕生すると直に初着を着せた子を藤吉郎が懐へ押入れて例の木槿垣から連立つて歸つていつてしまつた。また中一年を置いて一人の姫が生れた。與免姫とて大きくならば淺野幸長へ興入れといふ事に定められた。この女ばかりは早死で十七の春に親に先立つてしまつた。また中一年を置いて孫四郎利政を生んだ。その翌々年千世姫が生れた。

秀吉と利家

その翌年天正九年は彼女に悦ばしき年であつた。夫利家には能登の國を賜はり、長子利長には信長の娘を配された。——後に玉泉院——その翌十年彼女には主君であり嫁の親である内大臣信長は、六月二日の曉に京都本能寺の宿坊で逆臣明智光秀のために弑された。この一事こそ幸運な彼女

の一生が榮枯盛衰といふ事について深く深く考へさせられ晩年身を封土と家族のために贅にして長い間——十六年間を人質として江戸にとめられ十二歳の初嫁の折から目を掛けられ引立てられた秀吉の後の滅亡を凝と堪へ忍んで夫と子が残した國と家と領地の民と家臣とを安きにつかせる所因となつたのであつた。

光秀を征服した秀吉は漸くに彼が不出世の英雄である鋒鋦を現はして來た。幸運な秀吉の待ちも設けぬ事蹟は光秀によつて偽された。光秀は逆臣の名を持つて小栗栖に打たれ機を待ち暮してゐた猿冠者にうまうまと機會を與へてしまつた。

又左衛門利家もまた當然鋒鋦を露はす時機に會したのである。もとより例の木槿垣から往來してゐた小身者のころから肝膽を照しあつた仲である。秀吉には無二の眞友であり利家にも良き先輩であつた。たゞ天下

の形勢はこの二人を良友としての上に着色して利家はこの畏敬すべき友の旗下にあまんじて立つやうに時世は推移していつた。秀吉は利家に石川河北二郡を加封し金澤に住むことを許した。

夫利家が太宰府を支配する太守となるに従つて松子夫人も漸く史上的人物となつたのである。それまでは利家歴年の奮戦も一個の善戦の士であつたに過ぎなかつたが金澤に移り住んでからは利家の一進一退が天下の形勢に關係する重いものになつたのである。その上に松子夫人のそれまでは家婦としてよく子女を養つて夫に後の憂ひを憂慮らせなかつたのが家婦としての大事業であつた。夫人はその間に二男八女を恙もなく養つてあげた。そして彼女は夫が歴進すると共に彼女の技藝ばかりでなく精神の修養まで高めていつた。

それまでとても利家は夫人に何事をも相談されたに違ひはない。けれ



ども夫人の名が戦史に明に記せられたのは、天正十二年九月の末森の役についてである。この末森の役こそ豊臣秀吉の聲望を確固たるものにしたものである。

### 諸將の消長

織田家には秀吉利家よりも故參の諸將は群星のやうにあつた。秀吉が光秀を滅してからの振舞ひは嶄然と頭角を現し、銳鋒を發したので、故參の將は心地よく思はなかつた。そのなかでも信長の妹を妻とする柴田勝家は越前北莊で自盡するの止むなきにいたつた。その折利家は信長の命にて勝家の旗下に屬してゐた。勝家の自盡にさきだち賤が嶽に大敗したをり利家は己が居城府中に歸つてゐた。さうと知ると秀吉はただ一騎で駈附け城門を叩いて、隔意なく昔の交りどほりに、

### 又左又左

と呼んだ。呼ばれて門を開いたものにも隔意はなかつた。一時にせよ敵となつたのが二人には寧ろ意外なのであつた。秀吉はその時利家に石川二郡を與へたのである。それはいふまでもなく越中の佐々成政に當らせようとしたのである。その時秀吉の天下統一事業は前途遼遠なものであつた。勝家は滅びても織田信雄、信孝兄弟、佐々成政、瀧川一益等機を窺ふに、徳川家康があり、長曾我部元親があり、島津義久があり、北條氏政、伊達政宗あり、その他に根來、高野の山僧等がみな一方に雄を視してゐた。そのうちに徳川家と小牧の役が起つた。

小牧の役は後に和を講じたが、佐々成政はこのときこそ秀吉の虚に乗じようとした。それがこの末森の戦史である。この役こそ秀吉にも危急存亡の大事であれば、利家の一身一家にもまた重大事であつた。利家が死

を決しても勝たんとしたかけには、事理をよく辨へた夫人が、嚴然と我子利長と家臣の面々にむかつて、激勵した效もすくなくはなかつた。

末森は前田家の枝城である。加賀能登兩國のかたちが瓢のやうなものとすれば、その真中のく、れたところが末森である。それゆゑに末森が落城しては金澤を落されるのは目前のことといはなければならぬ。前田方でもこの城には重きをおいて、奥村永福を城主とし、その他にも名ある諸將を添へ千五百人の兵に衛らせておいたのである。

### 末森の籠城

ある日——天正十二年九月九日の曉の霧がはれると、末森の城下には佐氏の旗が忽然と風に靡いてゐた。殺到した敵兵は城の四方を瞬く間に取廻してしまつた。この奇襲に誰か驚かないものがあつたであらうか。

敵兵は一萬五千と、奥村永福は認めた。そしてそれほどの城を、利家の目利によつて預かるほどの將とて、狼狽へはしなかつた。

加賀能登、越中三國につらなる一帯の樞峯——三國峠、俱利伽羅峠は、昔時源平時代から物凄い歴史を持つ古戰場であり、難處である。利家はその附近の城に頼みをかけるのは道理ある事であらう。末森と金澤とは道程は僅に十里に過ぎない。末森城に於ては、二の丸、三の丸、已に支へ得ず、將兵多く戦死し、敵に水道を絶ちきられても、主將永福はよく本丸を支へて、家譜を焼き盡し、必死奮戦して、援軍の來着を待つとの急變に接して、誰も彼も一時に色を失ふまでに驚いた。利家は利長を呼んで城にとゞまるやうに言つた。利長は眞先にこそと言つてきかなかつた。親子は顔を見合せてかう言つた。

「ではすぐに一人づつでも出かけよう、軍勢を整へてゐるには及ばない。」

敵には不意の方が好い。馬に鞍さへおけたらば一騎がけて出かけるがよい。一足でも早く出るものが今夜の功の第一だぞ。」

利家がかう言つたのを危ぶむものもあつたが利家は士卒は庭にたたせ、汁かけ飯を食べさせたうへ、自身も物の具して庭上には黒毛の馬を引出させた。そのをり松子夫人はまだ幼少ない姫君達が膝のほとりを這ひまはられる年頃であつたが三方に鬨斗を入れて夫と子に進め、そして士卒にむかつては、

「今日の末森の後巻はまことに大事な軍であらう。みんなも心をあはせて功名したがよい。もしも末森を敵に取られるやうならば皆も討死をしたがよい。私も利長の母である人手にかゝるやうなことはしないから」と言ひ、特に利長にむかつては、

「お前も末森が落ちたらば討死をなさい」と言聽かした。利長は、

「仰せまでもございませぬ生死の別れは末森の運命と一つでござります」と決然と答へた。

利家はそれを聴きこれを聴き欣然として馬を走らせた。その勢はたつた百人ばかりである。そのあとで家臣の面々の妻子を城中に迎へ入れた夫人は、

「この軍は私達も實は安閑とはしてゐられない大變なのである。もし敗けた知らせがきたらばどうかお前方も私達と一所に死んでくれるやうに」

とその趣意を懇ろに解き諭された。松子夫人を生み、また旗下の士奥村助左衛門永福が妻を生じた當時の武夫の妻や子どもたちである彼等は夫

人に諭されるまでもなく夫人に従つて自盡するのを厭はなかつた。

### 夫人の勇氣

松子夫人の下には奥村の妻のやうな殊勝な女がゐる。奥村永福も曉より寄手に攻めたてられ、その宵には三百の士卒をあますばかりになつた。もうこれまでと自害の覺悟であつたときに妻は小袖を搔いとり、鉢巻をし、刀を横へて、手桶に入れたお粥を下女に持たせ、堀内の人々に手づから汲んで飲ませ廻り力をつけながら、

「昔楠といふ大將は、日本國を敵にうけて籠城したと傳へられてゐる。明日になれば金澤から援けの後詰が来る筈は知れきつてゐる。たつた今宵一夜ではないか、どうぞ防いでもらひたい」と慰め勵まして廻り歩いた。それを聞いた夫永福は我妻ながら天晴れ

の振舞であると思つた、男子にも勝つてゐると眺めた。然ながら女の力によつて、この城を持ち堪へたとあつては男子の恥辱だと自害することを思直した。それかあらぬか一しきりは危かつた城内の氣勢はとみに挽回された。その様子をもどかしく眺めてゐた佐々方の方の寄手の一人の將は、此城を火攻にしようかと進言した。成政は當然落ちる運命の城と見て勝軍に氣が傲つてゐた。

「この城の大手門を富山に持つていつて城の門にするのだから」

とそれを許さなかつた。そのうちに翌朝は利長の一隊に思ひもかけぬ迂路から衝きかけられた。それと見ると城中からも打つていで挾撃にした。

成政の宿望は達しられなかつた。彼は軍をまとめて富山に引上げた。前田方では勢ひのあまり越中を侵略するやうにさへなつた。その翌年に

秀吉は越中征服に出發した。もうその當時秀吉は關白となつてゐた。清政、政則、長政、且元以下豊臣の諸將はみんな従つてゐた。その雲霞のごとき大軍を犒らひ、前田家は上下とも煩忙をきはめた。ことに松子夫人には舊知の秀吉である。我家の慶事でもあれば、また舊知を祝すにもあたる。心を盡したる款待には秀吉も旗下の將も感謝にたへなかつた。天正十三年八月十八日の爽昧のことである。利家は途のほとりに立つて秀吉を迎へた。秀吉の一行の近づくを知るや馬から飛下りて君臣の禮をとつた。その時關白である秀吉は利家を見て昔の交りとすこしも違はぬ待ひをした。秀吉もまたすぐに馬から飛下りた。そして末森の戦ひの勞を謝したあとで、

「これはどうもよい取合せだ。甲冑と實によく出合つてゐる陣羽織だ」と利家の陣羽織に見とれて褒めたてた。利家の黄羅紗の陣羽織は長く

膝の下まで垂れてゐた。そのころの羅紗は關白の秀吉にも貴重品ではあつたが、秀吉はそれを褒めたのではなかつた。その形状のいかにもよいのを褒めたのである。そして利家のかうした好みはみんな松子夫人の見計らひで裁縫も手づからされる事や種々なのを夫君のために作つておかれて、その時々實に氣の利いた仕方をされることを、秀吉は長い馴染でよく知つてゐるので、ふと昔を思出すやすがでもあつたのである。

そして成政は秀吉の軍門に降つた。越中が立どころに治まつたのは利家の功である。成政の所領のうち三郡を賜はつた。その上の名譽は、羽柴筑前守と秀吉の前名を稱する事を許された。秀吉は松子夫人の懇ろなもてなしをも悦んで、利家の三女摩阿姫を請ひ受けた。摩阿姫は勝家の手許に人質となつてゐたが、北莊落城のきはに逃れて歸つてゐた姫で、秀吉に迎へられたのは十四であつた。「加賀殿」とよばれて秀吉の後房でも手厚くさ

れてゐるが後に秀吉が薨去後萬里小路卿に嫁いで三十四歳で死んだ。

### 織手の力

越中こそ平いだとはいへ利家利長父子は何時秀吉の軍に加はつてゐた。九州小田原朝鮮の諸役と七八年に涉つてゐるが松子夫人は時折京都に出で夫君に逢はれるだけで身は金澤の城中にとどまり國內の和平を専一とし、夫に内顧の憂ひを見せぬやうにとのみ勉められた。子女の教育國内の治務について夫君との書信の往復——其繁忙の中にあるて學ぶべきものはまなばれた彼女が信仰をも得て禪の教化にも心を傾けもした。彼女の慰樂は大なる安心立命の心がけであつた。

文祿元年には秀吉と共に利家も八千の手勢を率ゐて肥前の國名護屋の大本營に赴いた。そのをり前軍は朝鮮を風靡してゐた。肥前では在陣の

長いために諸將が倦じた氣色の見えるのについて秀吉は一策を案じだした。そしてその令には、

「諸將の奥方達を此の地へお呼びになつても好い。もしお出なされぬ方は侍女を代りにおよこしなすつてもよい」

といふのであつた。利家は急いでその事を夫人に告げてよこした。

彼女は行かなかつた。彼女の心は夫を忍ぶと同時に夫から托された責任の重いことを顧みた。彼女は自分の悦びを裂いた。夫から預けられた家のために國のために子女のために裂きがたい愛を裂いた。そして夫のために我にかはつて朝夕の世話を送るものを送ることにした。彼女は心操のよいものを選んだ。陣中の不自由を慰めるには若く美しく長途にも疲勞のないものを選び、その女は於千代保と名を呼び、夫人の髪

上けの侍女であつた。けれども夫人が待つ間は久しくはなかつた。幾月もへぬうちに秀吉は明の國主より和を請ふといふ報を手にした。その上老年になつての嫡子秀頼が生れたので軍務は利家にまかせておいて家康を従へて大阪へ還つた。のちいく日もたたぬに利家も召しかへされた。利家は久しぶりで金澤の城に入り夫人とあつた。その翌年十月伏見に邸を構へてその日から五年の間桃山城下の歡樂境に夫人と豊に楽しく親しい晩年をおくられた。夫人には此時をおいて満ち足りた生活はなかつたであらう。若くて相結んだ夫妻がこの日まで年のうちに幾日干戈のためへだてられず共に長閑に過したことがあらう。そして又左衛門夫妻藤吉郎夫妻の昔にかへつて身柄こそかはれ一人は豊太閤と呼ばれ一人は大納言の位ではあつても共に桃山の城中に住んで月も花も諸共に眺め睦しい交りを契つたのである。それはたゞに男同士ばかりでなく北の政所と

あがめられ大納言殿の東の御方と立てられても心の底には以前の木槿垣一重ほどの隔てもなかつたのである。けれどもその折は早人世の花である盛りは既に既に過去つてゐる。利家は五十七歳夫人は四十八歳である。そして利家には側室——後に壽福院と呼ばれてゐる(於千代保のことか)——が利常を生んだりした。

化粧田

秀吉が桃山城の建築は後代豪華の象徴とされてゐる。そしてまたその聚樂の臺には大君も御駕を還らされた。秀吉はまた利家の邸に臨んだ。その式は足利義政の故例に據り牛車衣冠をもちひ公卿殿上人も多く従へた。これは表立つた御成であつたが例の又左又左で打潤がれての出入りは幾度と數へるどころではなかつた。この兩英雄は此處に快心の笑みを

うかべて餘生を樂み味ひあつたのである。秀吉はかゝるをりにも總ての折衝に滑脱自在な細心で寛濶である松子夫人の取執を悦んで、江州高島郡二千石を化粧田の名をもつて松子夫人に與へられた。

秀吉が晩年まで利家と親しんだのは言ふまでもなく兩氏の心鏡に照しあはせた不言の何物かが秘んでゐたのであらう。とはいへ女懶しうしての警もある。この松子夫人が世の所謂賢女ならば長い年月の間には北の政所との間に面白くない事の起らぬとも限られなかつた。北の政所も豊臣氏の社稷の榮を助けた大きな力を持つ夫人で、他人には擢でた女である。かゝるゆるゑに夫人同士も男同士同様に畏敬しあつてゐたことはいふまでもないであらう。政所と夫人との睦みは次の一事でもどんなに深かつたかが知れる。秀吉のために利家はよく盡したが、松子夫人のために政所もよく盡したと言つてもよいほどである。ことは會津百二十萬石の城主蒲

生氏の家に關つたことである。

蒲生氏郷は英才をもたらし、この英雄崇拜の世に年齢四十で世を後にしてしまつた。その遺言は利家に託された。僅十三歳である一子鶴千代の身の上と領土の安全とを願はれた。頼まれてうけひかぬ利家ではない。ことに松子夫人の男では末子である孫四郎利政は蒲生氏の女を娶つてゐる。利家は早速に鶴千代に恙なく會津の遺封をつがせることを願つた。

秀吉は倏所に許した。

蒲生氏本領安堵の命は奉行のもとに下された。ところが奉行石田三成は氏郷を陥れたものであつた。安からず思つて、

「利家の推舉なのでおゆるしになつたでござりませうが、十三才の幼弱なものがどうしてあの大任に代れませう。奥羽は路も遠く、ことにあの心懸の測り知れない伊達政宗もをります。會津のやうな重要な土地は他



に代らせる良將が澤山にござりませう。鶴千代が成人し廿歳にもなり  
 ましたらば本領を返してやるお約束にでもなされて當分は……  
 と諫めるやうに言つた。秀吉は利家の進言であつたのでさう事は深く  
 考へずに許したが、なるほど三成の言ふ事も尤だと思はれた。で前言を取  
 消して、

「では鶴千代には近江日野の地を四萬石與へておかう」

と言はれた。それを聞いた利家は憤然として三成の仕業を憎んだ。百  
 二十萬石と四萬石——なんとといふ違ひであらう、それで有爲の將卒を多く  
 養へるものであらうか、蒲生氏は潰されてしまふのも同じことである。利  
 家は門を閉ぢて一室に籠り召されても病氣と云つて出なかつた。夫人が  
 諫められると、

「鶴千代は坊主にしてしまふがよい」

と言つたばかりで頻りと考慮に耽つてゐた。蒲生と前田の二家は利家  
 のこの黙想の破れる時にいかなるさまに變りゆくか測り知られぬものが  
 あつた。

蒲生家の危機

松子夫人の心勞は黙考する利家の憂慮にも劣らぬといつてもよい。夫  
 人は思ひ勞らつた末に、このやうな時の頼みにもと、日頃の好誼をおもつて  
 政所を訪うた。そして祕やかに、

「利家が出仕いたさぬことをお聴きになりましたか。あれは決して殿下  
 をお怨みまをすのではございません。殿下の御心事は利家もよく存上  
 けてをります。たゞ利家が憤みは三成に阻まれたのを残念に思つてゐ  
 るのでござります。私達夫妻は殿下に幼いときから御恩を頂いてをり

ます。そして其の間には一片の挾つたものもないのにかういふ事になりましたのは悲しいことでございます。もし利家が此處で一步踏みあやまりましたならば折角これまで頂いた御恩誼を失ひ前田家も蒲生と一所に滅亡してしまふで御座りませう。それでは他人の計畫に陥るやうなものでござります

と涙とともに苦衷を訴へたのであつた。北政所も草莽の時代から苦勞を嘗めつくしてきた婦人である。松子夫人の切ない見ても居られぬ心地を直に察して、

「私にもすこし考へがあります。とも角後刻お呼びするまで私に任せておいて案じない方がよいでせう」

と答へた。とはいへ引受けた政所も夫人に劣らぬ苦みであつた。なるならぬは前田の家にも關はる。さはいへ太閤の一たび仰出された定め

ある。内庭からの諫を取上げる例を政所が開いては百事擾亂の基となるといふ憂慮もあつた。然しながら豊臣に家臣多く海内の諸將數を知らず從へど莫逆の交友であり後事を託し且徳川を押へ得るものは此前田大納言でなくて誰があらう。此人をいま失ひ反を起させるやうなことがあつては誰がよく豊臣の後を見るものがあらうか——さかしくもいしくも北政所は決意された。そして機を見て秀吉に、

「利家は蒲生のことにつきまして、一たん有難い思召を頂きましたのを、大層悦んでをりましたさうでござります。それが三成の申出のために阻まれたと知りまして、只今は疾病さへ起してをりますさうでござります。私のぞんじますのには、會津は奥羽の重大な土地でござりませうが利家にさう力をおとさせてまで、他の者をおつかはしになるには及びますまいかとぞんじます。鶴千代はまだ幼少でござりませうが誰にか儲なも

の後見いたさせたならば蒲生の家も再興の悦びに忠義を勵むでござりませうし、利家の悦びはどのやうでござりませう。利家は古からの御知己よく、彼人の心持ちは御存の筈でござります。あの人は殿下の御殊遇のためには死をもつて報いるより外はないと思つてをるものでござります。殊に彼人を擢でて秀頼の大傅ともなされました。その御内意は憚りながら私も推察致すことが出来ます。三成の申出が尤ではござりませうし、ことに一度仰せ出された事では御座りますが、かやうなことで利家の面目を失墜させ、利家を軽くするやうな事がござりましては、豊臣家の將來に大きな禍を残す根となりはいたすまいかとぞんじます。もしかやうな事で、利家がすこしでも殿下をお怨みにぞんじましたならば、それこそ奥羽の諸將が楯を突くよりも恐ろしい結果になりはいたすまいか。どうぞ彼人に殿下の御徳の限りない廣さ深さをお示しにな

りまして、どうか利家の面目をたて、おやり下さいませうやうに」

北政所はあれを思ひこれを思ひ、豊臣の家の秀吉百年の後を思ひ、いつて涙のために聲がかすれ、それより多くは言はれなかつた。秀吉は自分むかつて哀訴する政所の決意が尋常なものではないと知ると、稍驚かれましたのであつた。秀吉はもとより利家がそれほどまでに蒲生の家封のことに、ついで力を入れてゐたとは思はなかつた。けれども奉行に對してもはや命を下した後である。そのために沈思せぬを得なかつたが、政所の言ふは正しい意見であつたゆゑに、

「そもじの言はれるのは尤のことだ。では明日鶴千代に出仕させよう。そして利家を悦ばせてやらう」

と諾はれた。政所のよろこびもどのやうであつたらう。けれども直様明日の首尾を傳へられた夫人の安堵はいふまでもない。夫人は政所に強

訴するには死を決してゐたのであつた。

翌日聚樂の第には蒲生鶴千代を召された。秀吉は鶴千代にむかつて父の遺封會津百廿萬石を襲けと令された。その上に鶴千代の烏帽子親となつて藤三郎秀隆と諱の一字をさへ賜はつた上首尾である。そしてまた家康と利家を召され家康の娘を秀隆に配するやうにと差圖をされた。會津は要害の地ゆる若年の秀隆のために利家と家康に國政を補翼するやうにと命じられた。誠に上々の首尾である。あまり事の意外であつたために、利家は鬱憤の晴れたばかりか、少しでも私の奉公の我儘のあつた事を恥かしく思つた。君恩の厚いのに感泣して、老骨粉碎するまでの奉公を心に誓はれた。それを眺めた秀吉も満足されたが、政所と松子夫人は互の家のため夫のために安心の胸を撫でおろした。

### 桃山の豪華

時は豊臣氏の威名海の外にもとゞろき人は人世の榮華に酔ひ世は春の花に酔ふ慶長三年の彌生山城國醍醐に古今未曾有の花見が催された。豊臣氏にゆかりある女人どもがこれほどに天下廣く肩身ゆるかに遊行して我等がために咲く花かとはかり櫻を眺めたことはなからう。この醍醐の花見は秀吉一代の夢をいかに華やかにかざつたもので秀吉が最後の快遊歡樂であつた。そしてそれがまた北政所にも松子夫人にも利家にもさうした運命を豫期したと言ひ得られやうか。利家も秀吉について其後幾許もなく死去した。政所と夫人とは長くあとに残つてゐたが君いまさすば——の感はことごとくに深かつた。松子夫人のそれからの半生は傷しかつた。

醍醐の花見は日本國に先例のなかつた婦人を主賓にしたといふ事である。そしてその主賓の中には松子夫人があつた。當日の盛宴はしるすまでもなく世に名高いことであるが花見の場處には花の間を縫うて五色の緞子の幔幕を曳きつらね花陰の枝から枝へは黄金の鈴を懸けわたし路筋は清淨に拭つたやうにされた。八つの亭には仰せを承はつたものたちが、我劣らじの心じらひをした。御座所お茶屋御旅館局達のおはしどころ御行水所まであまた出来はした。いふまでもなくこの行樂は秀吉が身の衰老を心に思はずとも魂に感じ昔時を振りかへつて北の政所の多年の勞を報いるに急がれたものであつたらう。親孝行な秀吉はその前年に百官をひきゐて高野に登山り故母大政所の供養をされた。さきには故人に今日は苦樂を共にしたる妻を樂ましめ慰めるためにと催されたのである。他の女性を遊せる意味は多少あつても第一の主賓は北政所であつた。その

陪賓には松子夫人をおいて誰があらう。

秀吉は秀頼を連れて先着し主だつて女性達を待ちうけた。當日の輿の次第は第一に政所第二に西の丸第三に松の丸第四に三の丸第五に加賀殿——摩阿姫である——第六に東の御方——則ち松子夫人である。人々は秀吉に迎へられ伴はれて花間を逍遙した。諸所を見廻つてのちに行水を濟ましそして女子達もおもひ／＼の假装をほどこして貴賤の別なく氣樂に興深い催しを見物し廻つた。

### 一炊の夢

この花見がをはると利家は長子利長に國を譲つた。五月には秀吉が病氣になつて八月八日には登遷された。秀吉は死の枕邊に利家を招いで秀頼の事を繰返して頼んだ。

「私が氣に懸るのはこれだけだ」

秀吉はかういつて利家の手をとつた。利家は秀吉の心事を察し泣いて誠意を誓つた。

淀君は秀頼が大坂城へ入るのを反對した。けれども利家は利害を説いて諭した。朝鮮出征中の諸將をも呼返した。松子夫人も共に大坂の城中へはひつた。

秀吉も自分の死期がさう近からうとは思ひもかけなかつたであらうが、後事を託した利家の命がかくまで早く終らうとは思はなかつたであらう、その翌四年三月のことである、もう利家は起つことの出来ないのを悟つた。そして松子夫人に筆をとらせて遺書十一條を作り利長に與へさせた。その中に兄弟仲のことに言及んで、

其方子もなく兄弟にも孫四郎ばかりの義に候間……

と言つて利長を大納言同前父とも兄とも思ふやうに利政に誓紙を書かせ子とも弟ともおもはれ萬事行儀もよくなるやう異見せよと書残させた。子を見ること親にしかずとか利政は後に家康に阻まれて心ならずも洛外嵯峨に閑居し辛くも母芳春夫人の分け與へた領によつて世を送つてゐた。そして利長に子のないために利家の側室壽福院の生んだ利常を嗣子にした利家の遺書に利常について書かれてゐない。傳ふるに利常は秀吉の落胤であるとの説がある、その眞偽は知らないが利常は加賀藩三代目の明君で常に徳川幕府の監視を逃れるため、鋭鋒を収めてゐたといふ。

春秋六十二利家は長命といふほどではない。時に夫人は五十三歳であつた。女夫のかたらひは四十年の間であるが共に住んだのは五十年である。夫君の枕邊に經帷子を捧けて、

「いくたびかの戦ひに人命をお絶ちになつたことはどれほどでございま

せう。せめて後世の罪業消滅のために、これをお着けになつて冥福をお祈りなされませう。

と夫人は進めた。曾て陣羽織をかうして裁縫して進められたをりは、利家は妻の心を嬉しむ、何時も悦んで着したに、その折ばかりは拂ひのけて、

「予は人の命を断つたことは、それこそ數へられぬほどであるが、まだ一度も不義の戦ひをしたことがない。なんで地獄へ墮ちてよからう。もし牛頭馬頭が来て呵責するならば、予も冥府に集まる諸將と心をあはせて地獄を攻めおとし、閻魔を擒にしよう。」

其處までは笑みを含んで言はれたが、慨然として、

「だが、予はもう五七年命がをしい。予の死ぬいまはの心残り、は他でもない。かうして死にきれずにいるのは、豊臣の家の前途の心懸りばかりだ。見ぬ世の末の替つてゆくさまを思ふと……」

と言つて手をのべ、新藤五國光の脇差をとつて胸に押當て、二聲三聲呻吟いて事切れた。松子夫人は泣く泣く柩を護つて金澤に歸り、野田山に葬つた。そのをり、京都の禪門紫野の大徳寺の圓鑑國師が夫人に芳春院の號を與へた。

### 號を芳春院

芳春院の名號、まだ新しく藩祖の墓の土、まだ濡れるに死に臨んで、心にかけて、如く關が原の役は起つた。家康は利長に加賀に歸つて國を治めたらよからうといつた。そして秀頼のことは決して心勞するなといふのであつた。利長は母にその議を計つた——芳春院は夫の心を心として、るので、歸葬後大阪にゐた——芳春院は夫が子に遺した、三年大阪を去るなとの言は、重いが家康の言葉を入れなくてはなるまいと答へた。かくばか

り家康の意を容れたのに、伏見大阪に流言して、前田利長は國に歸つて兵を起すといひ、重陽の節句を期して、大阪城中に家康を刺させようと計るものは、加賀にある利長が主謀であるといはせた。家康は怒つて利長を——前田氏を屠らうとした。利長が必ず他意なきことを分疏すると、家康はこんどは左手を出して、では芳春院を江戸の地に人質によこせと言入れた。その申入れを聽けば、秀忠の女を弟の利常に娶せようと告げた。芳春院はかくして、江戸へ諸大名の人質を取る手はじめにされた。

家の安危にかゝる事とはいへ、一族の中に尤も大切な芳春院を送るのは、利長の安んぜぬところであつた。戦雲漸く平らぎて、餘命を伏見大阪の間におくつてゐた母夫人を、まだ未開の僻地江戸へ送るのは、何よりも切なく思はれたのである。けれども家康は利長よりも却て芳春院を深く疑つてゐたのである。母を江戸に送つた利長はとも、角家康の下知によつた。三

成と上杉景勝と心を合せて兵を起したをりには、大阪方の三成と絶つて家康を援けた。そのをりの勝利は憂色のあつた家康を樂ましめた。家康は珍しくも自筆の書狀を芳春院の附人である村井長頼に送つた。それにはやがて上方をきりなびけ、芳春院殿御迎へまゐらせ候べくとあつた。

夫の亡きのち

上方を切靡け——故利家の憂慮は事實の上に現れてきたのである。芳春院殿御迎へとは、嬉しからせて悲しませる文字であつた。伏見大阪の住居をいかに思へばとて、家康に切靡かれての後に、よび迎へられるを何で待たう。ことに孫四郎利政は、おなじ腹の出ではあつたが、利長とは異つて、父の遺命を重しとし、利長の下知には従はなかつた。家康は利政の領地能登を禰つて利長に與へた。利政は京都に遁れてゐた。見るもの聴くものす



べて芳春院には懊惱の種である。家康の覚えよきも我子失走したも愛しき弟子である。仲に立ちてあらばと思ふにも身は人質の儘には外出さへも出来得ぬ不自由の身である。さま／＼の思ひわづらひが病氣を誘ひいだした。心神おだやかならず鬱々としては時に興奮して世を憤みなげき頭痛齒痛食慾不進となり胸に悩みをさへおぼえた上に齒根よりは出血して一時は息絶えたことさへあつた。將軍秀忠は驚いて典藥頭を送り藥治を司らせ、閣老に命じて夜すがら看護らせたりした。其ころ芳春院は子達の上にもさま／＼の思ひなやみがあつた。利政がさうであるに、七女の千世姫は細川忠隆——忠興の嫡子——に嫁してゐたが、忠隆は關が原の役に父忠興より不興を受け、それに類して千世姫も歸家を止むなくされてゐた。それに三女の摩阿姫は秀吉の没後萬里小路家に嫁したとはいへ、四女の豪姫——生れおちた時から豊臣の養子となつてゐた——は、大阪方の大將浮

田大納言秀家の室である。あれを思ひ、これを思へば夜も安く眠られぬは無理ならぬ事である。お千世は芳春院の末女——その末に三女喜意姫名不詳齊姫があつたが生れた日も生立ちも不詳であるし、何の中にも書かれてゐないから早世したのかも知れない——で愛しみも深かつたと見え、その後利長旗下の土村井長次に再嫁させ、そしてそのお千世姫へあてて芳春院は老いて近くに子も交友もない寂寞の中に人世の反覆つねない様を見聞きして再三往復の手紙があつた。芳春院は戦時に育ち戦國の士を夫にもち不安焦慮の空闊を多く守つた爲佛道の歸依信仰は淺くなかつた。多藝であつたことは裁縫をよくし刺繡をよくし、茶花の奥儀にも達し、その上書も見事に繪にも巧みであつた。曾て夫利家の陣羽織の背へ一面に鍾鬼を描きそれを刺繡した。また好んで達磨大師を描いた。陣羽織は今も前田侯爵家に珍藏され、達磨は大徳寺塔頭芳春院に傳へたといはれてゐる。

いま同寺には却て藏されず、同じ圖を最も多く描いた一つが前田家に残つてゐる。その畫幅の讚は芳春院の開基玉室和尚である。大徳寺の寺汁となつてゐる方には自讚して、

をしへおくそのことのはをしるべにて、こころのおくをたづねしらばや。

すぐしこしむそぢあまりの春のゆめ、さめてののちはあらしふくなり。とあつたと記されてある。

### 夫人の禪

大徳寺百十一世の法嗣圓鑑國師は名を春屋宗園と唱へられた。この學識貴く高潔な師について禪の道に入つた芳春院は、江戸に住むにおよんで愈々信仰を深め、慶長十二年大徳寺内に利家追福のために一寺を置かれた。

それが大徳寺塔頭芳春院である。國師はその開基に法弟玉室和尚を薦められた。玉室は澤庵禪師と共に國師の門にてもことに名ある大徳で、後に心源禪師となつた僧である。玉室和尚はそのをり芳春院の畫像を作り、國師と芳春院とに請ひ自筆の讚を加へたのを、表装して寺に傳へたのが同院の唯一の寶物となつてゐる。其圖は身に法衣をつけ袈裟をかけた法體である。讚には、

丈夫面目 意氣凜然

摩尼在手 衲衣掛肩

瞞却月上 壓倒華鮮

龜齡鶴算 億萬斯年

慶長十四己酉稔仲夏下浣前大徳春屋叟宗園暮齡とある。芳春院の讚は、

くもりなき秋のみそらの月かけを、こころの水にうつしてぞ見る。  
なきあとのかたみまでとやのこすらんむそぢあまりの春のおもかけ。

とある。芳春院は翌十五年には領地能登國曹洞宗の大本山總持寺を再  
建された。利家は能登を領すると直に寺田四百石を附した。利家が死去  
した翌年に芳春院は寺内に一字の寺を創起し利家と自分との位牌を置か  
せた。その寺は總持寺々中の塔司芳春院である。本堂はじめ諸堂の再建  
は利家十三年期の供養冥福のためであつたことはいふまでもない。芳春  
院には寺領三十五石を附け利家の木像と自身の肖像とをさめた。この  
芳春院の開基和尚は象山徐芸禪師である。肖像は時の畫伯狩野探幽の筆  
になつて、讚は象山禪師である。

奉贊

芳春院壽影

功德無窮佛閣僧

千門萬戶碧嶂嶂

看々二世安身處

日夜香華不盡燈

前總持象山叟書焉としてある。この肖像はいまも能登總持寺の什物で  
あつて國寶に指定されてゐる。肖像の芳春院は法體で頭には頭巾をかむ  
り手には珠數をもつてゐる。大徳寺の心源禪師が作らせた畫像も身のた  
け高く骨逞しく、眼は鋭く唇は固く、威容は凛として丈夫を凌ぐ面影を残し  
てゐる。總持寺に残る國寶狩野探幽の筆もその通りで肉のふとやかなこと  
をも語つてゐる。

### 人質の十六年

芳春院は江戸に質となつて十六年をおくつた。その間に遊行を許されたのはたつた二度であつた。齒根より出血して絶息などしたのち、典藥の申出によつて家康父子も許し、利長も進めたので有馬に入浴した。

さてもく恨めしき世中候や、そのうち空しくなり候べくと淺間しく候。

皆々死すべき時に死なねば、うたてしき事のみ聞申候迄にて恨めしきに候。

さてもく何たる因果のなるはて候や。我身にて思知り一しほ涙をながし申候。

などと千世姫にあてられた折々の追懐の悲痛の叫びも、有馬の浴みのをりには稍なだめられて、

文たまひおうれしく思ひ参らせ候湯はせはく候へども、宿は間も多く

一だんと廣く候。おもしろき山さにて候。つくづくしはおびただ

しき御事候。天氣もあがり候ておうれしさにて候。咳氣はいよく

はなつまり申候。かしく、

氣分は一だんとよくお入候。小松によく候て満足申候。命さへ御入候へばすみ申候。ちくもじ(筑前守利長)やがてかへりをまち申候までにて候。かしく。

はうより、しゆんもじへとあるにても推される。はうとは芳であり、いゆいもじとは千世姫が春香院を授けられてゐたからである。

二度目に遊参は慶長十六年の伊勢参宮であつた。家康は酒井家次に命じてこの行の沿道を備へさせて鄭重にとりあつかはせた。その歸途には鎌倉見物もゆるされた。けれどもこれは芳春院の思立ちではなく何か家康の思ふ所があつたのであらう。大御所家康が上洛して大阪へ立寄り、秀

頼母子へ對面したをり、自分は其儘駿河へ歸り、途次の警衛の酒井左衛門を  
 残して芳春院の途を衛らせたのである。大御所からの御馳走であるゆゑ  
 に、供には騎馬で歴々の者が随つていつた。道中に不自由のあらう筈もな  
 く、國々の諸侯からも進物の土産を贈り、名所名所を案内した。家康父子が  
 芳春院へ對しては表面にはかうした手厚い款待であつたが、人情からは冷  
 酷なものであつた。十五年ごろより癪を病みだした利長は十九年になつ  
 てもう全治の見込みがたたなくなつた。五月ごろには遺書をつくつて利  
 常と老臣とに後事を諭されたりした。そして相見ぬこと久しき母子は、見  
 るは今をかぎりと思へば堪へ難いものがあつた。利長にすれば自分達の  
 ために老いたる母を東に人質としてながく止めおき、その勞を擣ふ日もな  
 く先立ちてゆくのである。芳春院とても一日にても我子の命あるうちに  
 看護りたく歸心は矢のやうであつた。例の千世姫にあてて、

文こまゝと給ひ候委しく見申候。まづまづ高岡より皆々に金お  
 ぼり候よしなかなかの御事候。親さへ左様に候はぬに中々筆にも盡  
 しがたく思ひ參らせ候。これが祈禱にも成候て本服も候へかすと念  
 じ申涙をながし申候。われく方へもこんどしろがね給候やくたい  
 にも祈禱にも澤山につかひ申候。有難き事どもにて候。いよく氣  
 合よく候お心安く候べく候。

……添の衆も氣魂もよくお入候やと涙までこぼし申候。  
 と言ひ、または、

子供にも逢ひたく候。おちよをちことかるくにしてくだし候事な  
 り申候まじくや。さりながら高岡しだいに御入り候べく候。無用  
 と御申候はゞせひなく候。

とも述べられた。高岡とは病みたる利長の住んでゐた地の名である。

利長も堪兼ねて江戸表にある老臣にあて、芳春院に逢ひたいと言ひやつた。尙々つまり候て母に逢ひ候てはいらざることに候。ちと前かどに逢ひたく候。

わざと申入れ候。我ら疾病ちとおも申候。而なども腫れ、肩腹なども浮き申候。はや近づき申かかと存候。かやうに候てはほどなきもの故容體薬師へたづねられ候てたまはる可、その口次第にすこしもまへかどには、にあひ度候。食事はこのうち六日までよくす、み申候以上。

### 子と別れて

かく親子互ひに心ばかりは通はせても、相逢はん思ひは通らなかつた。五月二十日といふ日に利長はむなしき亡骸となつてしまつた。徳川氏の

冷酷も厳しかつたが、そのをりは今將に大阪に事のあらうとする時であつたので容易に芳春院を許されなかつたのであつた。その訃音が江戸に知れてのち漸く歸國を許された。それとても、六月の初旬に芳春院はつらつらと過去のことなどおもひくらしめてゐたをりにも、利長の代ではないゆゑ、自分を人質にされておく必要はあるまいと思ひつかれた。その事を申出たところ尤であるとおつて、芳春院の代りには、利長の弟で三代の藩主となつた利常の生母壽福院を質とした。

十六年目にてはじめて自由の身となつた芳春院の心は、その日のうちに子等の住む領地へと飛んでいつた。残る脱殻同様な身にも翼がほしいと思はれるほど急ぎに急いで、ともあれ利長の臨終の地高岡へとむかつた。そして生きて逢はれなかつた利長の墓前に、死んでいつた人でなくては測りしる事の出来ない感慨を抱いて涙を流して向つた。そして幾日経よう

とも立去りがたい思ひをたたんで、他の子達にも逢ふべく金澤に還つた。利長の室玉泉院もあとに従うてゐた。行くものにも待つものにも涙ばかりがさきにたつた。迎へた子女の中に千世姫もかなしい過去をもつてゐる。それにもまして太閤の養子となつて浮田家へ嫁した豪姫こそ哀なるのであつた。夫中納言は家康のために八丈が島へ流され子には別れて生れた日から一日も居ついたことのない生家へと、四十年を経て戻つてゐる肩身せまい身であつた。そして迎へられる芳春院は曾て利家繁昌のうち、に在城した面影は何處にも見出されぬ七十に近い法體である。十五年二十年をへだてて相見たものは聲をあけ面を伏せて泣いた。利常は家の祖であつて、さうして子孫の恩人であるこの芳春院に對して孝養のかぎりを盡した。城内に新に館を營み、日夜々御呢近の者を代りに宿直させ、その頃流行の芝居を催させ踊子をよびなどして多年積勞

の爵を慰めるのを事とした。芳春院は漸く我自身の身に返つたくつろぎを覺え、暇あれば讀書坐禪し、嵯峨にかくれ住む利政の子を養ひ、別に家を興させようともした。とはいへ、憂き事は根を絶つものではなかつた。この年十月に一旦和議の調つた大阪の戦ひも翌年夏に再び起つて、畢に豊臣家は滅亡してしまつた。いまは關東方である利常は殊勳をたてて金澤に凱旋した。

それを見聽きした芳春院の心事は憶測られる。彼女はしのびやかに京都に赴き、利政に逢ひ、大徳寺に師を訪ね、秀吉の廟を拜したのちに絶えて久しき北の政所を高臺院の閑居に訪うた。江戸に質となつての後は憚つて音信を絶つてゐた二人が、豊家滅亡の後の日に逢はうとは思ひもよらぬ事であつた。とはいへ、大阪に来て見れば心をいたためぬものとははない。七十年來張りつめた心の弱りにつけいつて病は募つていつた。

西風かりそめならず吹立つ秋七月十六日、この世は假の宿りであつたと思ひつゝ、逆旅の地で病は革まつた。時に元和三年である。この夏京都に出で後暑にくるしみ眠をたしなみ、口中の疾のために食を絶し、醫薬を用ひてゐたが、涼しき秋を待つて金澤へ歸り灸をこゝろみようとしたがそれは果さなかつた。彼女は知らず、永訣を告げるために、只一人昔ながらに心合ひの友であり、唯一人さびしく榮華の果を眺める悲しき高臺院の前の政所を訪れ、大阪の城跡を弔ふために上洛したのであつた。遺骸は野田山の利家の墓側に葬られた。年七十一であつた。

# 瓜生岩子

## 平民の友

この親みのある永世平民の友である老嫗を、ふかく敬愛する心持ちをもつて、瓜生のお婆さん、お岩嫗さんと呼び親みなつきたい心地がする。このお婆さんもまた男女ともに傑出した人物が多く現はれた幕末維新の寡圍氣のなかに包まれ養はれてきた、大きな目覺めた魂の所有者であつた。そしてその當時の諸々の慧星が明星が夢みた海外文明の文物のなかで、誰もかへり見なかつた神の教への貴い事業を知らず知らずに彼女は天から



授けられた使命とした。けれどもこの瓜生のお婆さんがなしたけた慈善事業は彼女が生れるからに受け出た使命であつて、その遭遇し目撃した悲惨のために啓發されたので教を外國にうけたのでは決してなかつた。この瓜生岩子といふ女は生れべき時世に生れたのであつた。彼女は維新の時變のうちで歴史に最も酸鼻の文字をとめる會津藩の若松城下に生れた。そしてさういふ道に導いてゆかれる順序として幼時から苛酷とも見ゆるほどな天の論しにあつて育つた。彼女は慈悲の權化の使徒として充分な素質があるかどうかとたしかめられたのである。選ばれたものは生れながらに天稟を受けてゐた。天の目はあやまらなかつた。

廿三萬石會津鶴城の若松の外れに喜多方といふ町がある。油屋渡邊利左衛門は四邊に聞えた富有であつた。彼女は利左衛門の初子で文政十二年二月十五日若くさの生ひ出るころにうぶ聲を揚けたのである。母のり

えは若松城下を北へ六里半耶麻郡熱鹽村の名家瓜生家の出であつた。岩子の生れたをりにも長閑な田舎の方がよいであらうといふので母の實家で産の紐は解かれたのである。翌年弟半治が生れた。

このお婆さんがまだやつと五才のとしに、もうそろ／＼と世の中の変動する序曲とも言ふやうなことがつゞいて起つてきた。天保四年八月には大雨大風不作と天の警めのつゞいた果に、財政ともに紊亂して悪貨は濫發された。それが最初で悪い年はつゞいて來た。天保七年にはその極に達し、寒中に彌生の暖かき朗かさであれば、四月には寒中よりも寒く、五月雨ごろには盛夏すらも凌ぎがたい暑さになり、早らなければならぬ暑中には雨降りつゞきで春の花が咲きかへり、唐葵などは四度も五度も咲いたり、十月に笥が出たりして終には大飢饉が押寄せてきた。日本の國中何處とて同じ缺乏であつたが都には黄金を抱へて餓死するもののあるかはりに鄙で

は地の底まで掘りつくし、土に嚙りついて息絶ゆるものが多くあつた。大阪には天満の奥力大鹽平八郎の一揆が起つたりした。

## 烈しき印象

岩子は八才になつてゐた。青く萎びた人達が、たつた一つの木の實を争つて食べるのを見たであらう。倒れてしまつた母の骨ばつた胸をひろけて、出ぬ乳をもとめて聲もかされるばかりに餓になく子の泣聲も耳にしたであらう。岩子は生れて初めて食物のない悲慘を感じた。純な子供の腦裏には消すことの出来ない印象を残したにちがひない。けれどそれは自分の上でもあれば他の身の上でもあつた。その翌年には世間にはかゝりのないことで、岩子姉弟には生れてからはじめての悲みが來た。思ひもかけぬ死の手はまだ若い盛りの彼女等の父を暗い道にと導いていつて歸ら

ぬ人としてしまつた。廿七才の若い母は不時に來て彼女から命であり力であるあるものを挽とつて行つてしまつた運命のむごさに泣盡して、岩子と弟半治とを兩方に抱へて、惘然と失心したやうになつてゐた。とも角もと姑は山形に分家してゐる弟夫婦を呼寄せ、諸事の差圖をして野邊送りもすませた。そして程すぎたある日、岩子の母にむかつて、日頃の心勞もあり、旁々子達を連れて實家へ一泊してきたがよいと外出を許した。そこにどういふ意味のあつたか知らぬ身は言はれるまゝに實家に訪れていつた。その夜は心優しい人達にとりまかれて種々な物語りに夜をふかした。油屋の店の方でも嫁を退けて水入らずの親子の物語りである。どんな相談に夜を更したか、更けてから火を失して一軒焼けて油屋の店は烏有に歸してしまつた。其通知をうけた瓜生家の驚きは想像に餘りある。岩子の母は家の者に助けられて馳附けた。もう其時には灰燼に歸した焼跡に消え

きらぬ餘煙が立昇つてゐるだけで、さしもの店の土蔵づくりのあともとめてゐるなかつた。誰しも油屋は富豪であるから、焼跡には金銀の塊があるに違ひないといつてゐるが、その影すらもなかつた。位牌だけでもと岩子の母はくやしがつたが、それすら取出すひまがなかつたといふことである。それはあんまりな事だとは、岩子の母のりえが思つたばかりでなく、近隣のものたちさへ審しく思つたのである。その夜出火のをり人波を掻分けて立退いた老婆は狂人のやうになつてゐた。そしてその手には大切氣に大きな包みが持出されたといふ事を後になつて人の口から言ひ傳つた。その後間もなくである。姑はおりえに向つて、

「お前はかういつたらばどう思ふか、しれないが、いまはもう私達の住む家といつてはない。といつて誰も彼もみんな支店の方へ引取つて貰ふわけにもゆくまいから……どうだらう、お前はまだ年も若いことだから、再

縁したらば。すれば私が二人の子は養つてもよいが」と言つた。おりえにはさういふ言葉の裏の意味が酌みとれた。厭といへば、では構ふことは出来ないといふのであらうと考へた。火事以來姑の心はずつかり孫達からも離れてゐるのも知つてゐた。彼女はよんどころないはめとなつて二人の子を連れて實家へと引取つた。

### 母の故郷

其處は岩子にとつて馴染のない土地ではなかつた。岩子は生れてから幾月かを母の實家に養はれてゐた。襦袢の彼女は母にだかれて温泉に浴したりしてゐたところである。熱鹽村の瓜生家は村でも舊家であつた。三方は山又山に取りかこまれ開いた方の一面に清き流れ一筋が村を廻つてゐる。護法山下の日中川の熱鹽橋を渡つて上へ半町家並二十軒ばかり

の山狭に、白壁の土蔵のある角屋敷が岩子の母の生家であつた。土地の瓜  
 生氏は瓜生出雲守の後である。赤崎長者と呼ばれたものもあつたとかい  
 ふがむかし出雲守の子が西國巡禮を思ひたつた。出雲守はそれを佗しと  
 嘆き我意も通り子の願ひもかなふやうにと若松城下より熱鹽にいたる路  
 の上三の宮とよぶあたりから建連ねて西國よりとりよせた石で三十三體  
 の佛像を造らせた。もとよりその尊像は三尺ばかりの大きさに過ぎない  
 がさうした傳説のある土地であつた。岩子の母の出た瓜生氏はさうした  
 家の後胤であるかどうかはよく知られなかつたが元祿のころから土地の  
 郷士として會津松平侯に仕へこの村里の諸事の儀式はみなこの瓜生家で  
 あけるしきたりになつてゐた。正月四日源翁和尚のお湯開といふことが  
 あるをりにも、此家のものが棒をつけてした。源翁和尚といへば、建長の昔  
 那須野が原の殺生石を折伏打破した聖僧であつたことは誰人も知つてゐ

ることである。その功を賞して時の執權北條時頼が源翁和尚を開基とし  
 た寺院がこの里にあつた。瓜生の角屋敷から右にゆく路の古刹で、老杉繁  
 茂し銀杏樹や大榎が聳えてゐる。この寺は護法山示現寺とよばれる曹洞  
 宗の禪寺で、近郷三十六箇寺の本山、寺領五十石あり、芭蕉の碑には、  
 山中や菊はたをらぬ温泉のにはひ。

としるされてゐるかなりな名所である。源翁堂の側にその高僧の墳墓  
 がある。(後にそれに隣りして岩子の墓が建てられた)  
 さうした住みよい温泉の湧出る山中の質朴雅純な一仙境へ而も母のり  
 えを愛する肉身のものばかりがへだたりなく住む家へ歸つて來たのであ  
 ったが柔かい子供の胸に焼きつけられた陰影は、その時こそ大人のやうに  
 深いものではないやうに見えるが、それはものにまぎれる一時のこと、後  
 になつてはとて大人には想像の出來ないほどに分明と思出すものであ